

発行

財団法人 大学セミナー・ハウス

《所在地》

東京都八王子市下柚木(〒192-03)  
電話 0426-76-8511~3  
振替口座 東京 5-74590番

編集

大学セミナー・ハウス  
企画室

編集・発行人 岡山 猛  
製作 中央論議事業出版

第68・69合併号

昭和55年9月25日

内容

80年代のエネルギー・シナリオ … 1  
 第109回大学共同セミナー …… 2  
 法人ニュース …… 4  
 〈特集・開館15周年を記念して〉 … 7  
 座談会・創始の心、そしてこれから  
 大学セミナー・ハウス略年譜  
 大学共同セミナー主題15年の歩み  
 事業部だより …… 15  
 千人会 …… 17  
 利用状況 …… 19

# セミナー・ハウス

## SEMINAR HOUSE NEWS

80年代における世界の政治経済は極めて不安定で予測しがたい。その主たる要因は石油問題、エネルギー問題であるといつてよいだろう。60年代を通じて先進工業諸国は、豊富で安価な石油の供給を基盤にして、「豊かな社会」を築いてきた。欧米のメジャーズ（国際石油会社）が権利をとって自由に石油を生産し、価格競争によって安く工業国へ輸出してきたのである。こうした状況が一〇年間も続いたのは、毎年、新規に発見された油田の埋蔵量が生産を上廻って累積埋蔵量が増え、価格が下がるといふ需給のメカニズムがあったからである。

ところが70年代に入ると情勢は逆転した。先進工業諸国が石炭の利用をやめ、安い石油を求めるようになって急速に需要が増えたこと、加えて産油国自身の政治的自覚も高まって、神が砂漠の地下に与えてくれた巨大な油田を、自国の建設、経済社会開発に有効に使用したい、と考えるようになったためである。それまでメジャーズに与えていた利権をとり戻し、産油国政府が生産量や価格を決定するという傾向が明確に現われてきた。73年秋に第四次中東戦争が起

り、世界はいわゆる第一次石油ショックに見舞われた。この時点で原油価格は一バーレル、一〇ドルと、79年に四倍に脹れ上がった。その後、19年2月のイラン革命による第二次石油ショックで、一バーレル、三〇ドル余にまで上がった。石油の生産コストは、OPECの輸出量の三分の一を占めるサウジアラビアの場合に、約一〇セントで、メジャーズの請負料三〇セ

ントを加えても五〇セントとみてよい。海底を掘るヨーロッパの北海油田で七〜八ドルだから、この価格水準は実際のコストとは別に、OPECが歴史上かつてなかつた強力なカルテルによって維持しているものである。

こうした急速な原油価格の値上げによって、世界経済は長期の不況に見舞われ、インフレと経済停滞、スタグフレーションに陥っていることはご承知のとおりである。梅棹忠夫氏は、これを地主農奴ならぬ「油主工奴」の時代と表現しておられる。OPECは将来にわたってもインフレレート、あ

るいはドル為替の低落の程度によって、石油の実質価格を維持していこうとしており、85年には一日当り三、五〇〇万〜三、八〇〇万バレルの輸出が必要といわれる世界の需要に対して、平均生産量を三、二〇〇万〜三、三〇〇万に抑えようとしている。産油国は将来の脱石油の国づくりを目標に、石油資源保存政策を強力に推し進めているのである。これに対して、工業国では国際エネルギー機関（IEA）を作り、石油への依存度を少なくするための共通の努力を進めていこうとしているわけである。

それは、エネルギー問題の対応として、具体的にどのような方策があるのだろうか。一つは、石油にかわる供給エネルギー、いわゆる代替エネルギーの導入をふやす道を探ることである。代替エネルギーとして何が重要な役割を演ずるかは、国によって異なるが、その主要なものには原子力、石炭、そして天然ガスの三つである。日本はまず、安定供給とコストの面から原子力を考えているが、スリ

マイ島の事故の教訓を十分に汲み取って、技術の改良を推し進め安全性に万全の配慮をしていかねばならない。この一〇年間のエネルギーとして原子力の次に考

えられていくものは、天然ガスである。天然ガスはアジア太平洋地区から中東にかけて未利用資源として沢山あり、亜硫酸ガスが全くなく、NOXの排出量が少ないクリーンなエネルギーである。そして第三番目に、かつて石油にとつてかわられた石炭が、再び見直されるようになった。四〇〜五〇年後、核融合や水素・太陽熱の利用が可能となる時代が到来するであろうが、それまでの間、相当大量の石炭を使わざるを得ない、という考えに世界は共通して立っている。かつて五、五〇〇万〜六、〇〇〇万トンあった日本の石炭生産量は、現在、年間一、九〇〇万トン

である。資源の貧弱さによることもあるが、主として炭坑爆発という保安上の問題があるからである。将来はボイラー用炭の不足分を海外からの輸入でまかない、三、〇〇〇万〜五、〇〇〇万トンを使用するだろうと考えられているが、石炭は、排煙から出る亜硫酸ガスなどの処理、灰捨て場の問題等々、他の燃料に比べて公害要因が多く、将来は技術開発による石炭の液化、ガス化が重要な課題である。



日本エネルギー経済研究所会長  
向坂 正 男

### 80年代の

### エネルギー・シナリオ

その他のエネルギーとして、日本の場合には火山による地熱資源の利用が考えられている。これには次のような賛否両論がある。フッ素を排出するので地球の中に水を送り込まなければならぬし、豊富な資源の大部分が国立公園の中にあつて自然保護と矛盾する、というのが反対の立場である。しかし地熱資源を本格的に利用するということになれば、全国二〇ヵ所の候補地に、それぞれ地下三、〇〇〇メートルには発電能力に換算して一五万〜二〇万kWの蒸気地帯があるといわれている。

しかしながら、エネルギーの供給面のみを考えていたのでは、七〇％という現在の石油依存度を減らし、実質五％といわれる80年代の経済成長率を保ちながら生活水準を改善していくことは、とても困難である。そこで第二の方策として、省エネルギー、エネルギーの合理的利用の方向がある。エネルギーは使えば使うほど公害対策がなされなければならない。供給と公害防除の両面にお金がかかるとい

う。かつて五、五〇〇万〜六、〇〇〇万トンあった日本の石炭生産量は、現在、年間一、九〇〇万トン

である。資源の貧弱さによることもあるが、主として炭坑爆発という保安上の問題があるからである。将来はボイラー用炭の不足分を海外からの輸入でまかない、三、〇〇〇万〜五、〇〇〇万トンを使用するだろうと考えられているが、石炭は、排煙から出る亜硫酸ガスなどの処理、灰捨て場の問題等々、他の燃料に比べて公害要因が多く、将来は技術開発による石炭の液化、ガス化が重要な課題である。

その他のエネルギーとして、日本の場合には火山による地熱資源の利用が考えられている。これには次のような賛否両論がある。フッ素を排出するので地球の中に水を送り込まなければならぬし、豊富な資源の大部分が国立公園の中にあつて自然保護と矛盾する、というのが反対の立場である。しかし地熱資源を本格的に利用するということになれば、全国二〇ヵ所の候補地に、それぞれ地下三、〇〇〇メートルには発電能力に換算して一五万〜二〇万kWの蒸気地帯があるといわれている。

（次ページ5段目へつづく）

（次ページ5段目へつづく）

（次ページ5段目へつづく）

（次ページ5段目へつづく）

（次ページ5段目へつづく）

●開館15周年記念  
第109回大学共同セミナー

主題——エネルギー・システムと現代社会

期日——昭和55年5月30日(6月2日)

Ⅰ ゲスト講演

I 80年代のエネルギーシナリオ  
日本エネルギー経済研究所会長  
向坂正男氏

II エネルギー問題と社会  
朝日新聞論説主幹 岸田純之助氏  
△全体講義

△エネルギー・システムの主流と  
支流  
横浜国立大学教授 太田時男氏

△セクション演習

A エネルギー経済の諸問題——  
危機の虚実と経済分析の有効性  
・限界  
慶応義塾大学教授 深海博明氏

B 資源・エネルギーの分配と南  
北問題  
早稲田大学教授 西川 潤氏

C 産業におけるエネルギーの転  
換 東芝エネルギー機器研究所  
主任研究員 佐藤光雄氏

D エネルギー技術と安全環境  
大阪大学教授 石谷清幹氏

E 科学・技術史におけるエネル  
ギー  
東京工業大学教授 道家達将氏

△運営委員

東京大学教授 太田時男氏

△参加学生 81名(内女子13名)

早大(12)、横浜国大(11)、東大

(8)、筑波大(5)一橋大(4)、東女

大、武蔵大(各3)、東外大、ICU、

芝浦工大、成蹊大、津田塾大、明治

大(各2)、東北、東京学芸大、東京

農工大、名古屋大、城西大、亜細亜  
大、学習院大、慶大、上智大、中央  
大、東京経済大、神奈川大、産業能  
率大(各1)、その他10 計26校

今年、開館15周年を迎えての記  
念セミナー・春の部として昨秋以  
来、野田、太田両氏が中心となっ  
て企画、推進されたセミナーであ  
る。80年代当面のこの世界の課題  
にどう取り組むか、苦心の結果が  
上記のようなテーマ設定となり、  
かなりハイレベルな、大学共同セ  
ミナーにふさわしい内容構成にな  
った。幸いに、このホトで、し  
かも基本的に深い洞察を求められ  
る問題の解明に適任の諸指導教授  
のご協力をえて、終始、熱心な討  
議が、三日間にわたり展開された。

初日はまず向坂正男氏のゲスト  
講演から始まった。別掲のように  
80年代が当面するエネルギー問題  
をめぐる世界的状況と、それに對  
処して考えられるべき視点を総括  
され、格好の先導役をつとめてい  
ただいた。つづいて各セクション  
の指導教授から、それぞれ担当の  
テーマとアプローチの視点設定に  
ついて、簡単な解説がなされた。

Aセクションの深海氏は「抽象  
的な論議だけではダメ」とい  
われ、ご自身、世界一六〇カ国中、  
六〇カ国を歩いて廻ったの経験を  
もとに、エネルギー問題に根づい  
く存在する数多くの幻想、誤解を

経済分析の筋を通して打破しよう  
と、精力的な姿勢を示される。  
Cセクションの佐藤氏は現実の  
企業体をバックグラウンドに、デ  
ータ・ベースで皆さうといっしょ  
に考えましよう、と、実務企画マン  
ならではの発言。

Dセクションの石谷氏は目下、  
学術会議で「エネルギー需給の基  
本問題」をご担当。現状に立脚し  
つつ、しかも現状を乗りこえる、  
技術を前提としつつ、なお技術を  
こえて想像する、そうした人間の  
イマジネーション、創造力の発揮  
のむずかしさを説かれる。  
(以下、西川、道家両氏のもの  
はご都合で翌二日目になされた。)

今日叫ばれる資源危機、エネルギ  
ー危機も、実をたどれば、われわ  
れの選択と別のところからの選択  
による需給不均衡なのであり、本  
来は需給はかならず均衡する。そ  
うした観点から、いわゆる国際分  
業体制の不合理性を明らかにした  
い、との発言がなされる。

Eセクションの道家氏は、今日  
のエネルギー問題をとりまく条件  
として、自然的条件と社会的条件  
の二面性を指摘、人工的システム  
の中に、社会と科学を媒介する技  
術をどうつくり出すかを、過去の  
歴史を検討しつつ考えてみたい、  
との趣旨のご説明。

第一日目、講堂での集会はこの  
で散会、夕刻からは各セクション  
ごとの演習に入った。

二日目は午前太田氏による全  
体講義、午後の岸田氏によるゲス  
ト講演を間にはさみながら、二回  
にわたるセクション演習がつけ

られ、いつものことながら議論白  
熱、深更におよんでなおやまない  
情景が各所に見られた。  
ここでは紙面の都合から太田運  
営委員による全体講義の要旨の紹  
介にとどめた。

「エネルギー・システムとは何  
か」の問いに対して、氏はこれを  
人間のからだにたとえ、本来は部  
分部分が密接な関連性をもって機  
能すべきものだが、これが現在は  
バラバラだ。エネルギー源の採掘  
から輸送、貯蔵、精製、変換、利  
用の全過程をシステムとしてとら  
え、これを世界的規模で有機的、  
合理的な形に考えあらためてみる  
ことが、当面する問題解決の前提  
ではないかと言われる。  
またエネルギー問題を原点に立  
つて考える意味から、その語意、  
エネルギー(人間の活力、精神力の意)  
に着目、まずこれが人間の労働力  
に代替しうることの実証からはじ  
めねばならない。現代的状況はむ  
しろエルゴンの反対語、アルゴン  
(怠け者)の状態にあるのであつ  
て、今こそアルゴンからエルゴン  
へ、過去の歴史の過程の反省によ  
つて、エネルギー・システムの交  
遷の意味をつかみながら、頭と変  
らだをつかいて問題の本質を見き  
わめることの重要性を説かれた。

さらには、そもそもエネルギー  
とは何か。一口にいえば、それは  
エントロピーの集積形態ともい  
うべく、太陽、風力、水力、その他  
もともと大自然の中に散在するさ  
れを再び発散させる過程で二次エ  
ネルギーとしての活用をはかる、  
そこにこそ科学、技術面での新た  
な発明が要求されるとする。

(前ページよりつづく)  
は、エネルギー管理部を設けて、  
今まで無駄に空中に放出していた  
エネルギーの再利用に努力するよ  
うになった。鉄鋼業では7~8年  
間で10%の節約を目指していた  
が、実際には5年間で達成でき  
たといわれている。日本の機械工業  
はこれまで省力化を推し進めるこ  
とに成功したが、今後はエネルギー  
効率の高いものをいかに作るか  
に努力を向けなければならない。  
また消費者も断熱材や燃費の少な  
い自動車など、エネルギー効率の  
よいものを逐次、選択していくこ  
とが必要である。エネルギー0グ  
ロースの社会を21世紀に向かって  
実現しなければならぬ、と私は  
考えている。  
(第109回大学共同セミナーのゲスト講演よ  
り。文責・編集者)

最後に新エネルギーとしての水  
素エネルギーの問題にふれ、一〇  
年前、ジュール・ベルヌが難破  
したある船員たちの孤島生活を描  
く「ミステリー・アイランド」と  
いう作品の中で、生活に必要なエ  
ネルギーをどうつくり出すか、思  
案のすえ、「海水を酸素と水素に  
分解しよう」といったふうなこ  
とを言わせている。見方によつて  
は、これは今日のエネルギー問題  
を予見しているかもしれない。現  
に植物は太陽光を酸素と水素に分  
解する作業をうまくやっているで  
はないかと、これからの自由討  
議を誘う形で、この全体講義はし  
めくられた。

第三日目、学生議長団の司会に  
よつて全体集会が三時間にわた

# エネルギーその過去と未来



壇上の吉田氏(上)と伏見氏(下)(朝日講堂にて)



山岸健氏の司会で、まず茅誠司理、共同セミナー委員会副委員長、

これは別記のごとく、同じく開館15周年を記念して開催の第109回大学共同セミナー「エネルギー・システムと現代社会」の締めくくりとして企画され、幸いに伏見康治、吉田光邦両氏のご同意をえて実現したものである。

これは別記のごとく、同じく開館15周年を記念して開催の第109回大学共同セミナー「エネルギー・システムと現代社会」の締めくくりとして企画され、幸いに伏見康治、吉田光邦両氏のご同意をえて実現したものである。

伏見康治氏の講演「将来エネルギーとしての核融合」は、多年にわたる氏自らの研究体験を、施設撮影のスライドを用いながら説明され、今や21世紀の新エネルギーとして最大の関心と可能性について正しい知識と、学問への新たな感銘を聴衆に与えた。散会は定刻をすぎ、21時に近かった。

以上、三日間にわたる、文字どおり学際的雰囲気につつまれたこのセミナーの模様のごく一端をおつたえするにとどまった。参加学生の専攻も文・理諸分野にまたがっており、それだけに幅ひろい交流により、明日の学問探求への新たな視野と意欲を胸にいだきつつ丘をくだったことと思われる。

昭和48年10月の第四次中東戦争後の第一次石油危機、昭和54年春の第二次危機は、漸く、産業・経済、あるいは、工学・技術の課題としてエネルギー問題を提起した。また、それに対する対応も実効をもたらしつつある。

大学セミナー・ハウス開館15周年記念事業の一つとして、公開講演会「エネルギー その過去と未来」が去る6月2日、朝日新聞社の後援をえて、18時より有楽町朝日講堂で開かれた。

事長の挨拶があり、つづいて吉田光邦氏の講演「エネルギーの思想と歴史」が、雨中にもかかわらず参集の約三〇〇人の聴衆を前に行われた。氏が専門として造詣、古近東西にわたる文化史の知識を背景に、エネルギーの開発と蓄積の歴史、その源をなす思想の流れを平明に語られ、人智に対する信愛感をおのずからに浸透させた。

このあと、慶応大学マンドリンクラブのご好意により、応援演奏「エデンの東」他二曲があり、つづいて上記第109回大学共同セミナーの実施報告が太田時男、野田春彦両運営委員によって行われた。

現在では将来構想と中期構想のつなぎを考へるべきだが、リード・タイムの先取り可能か、目先は悲観論にならないかを。悲観論をテコに状況突破の努力をすべきだ(深海氏)。

私は運営と全体講義を受け持ち、演習を担当しなかったが、自分の講座の学生が、他の講師の素晴らしいゼミを受けているのを見て、ホトギス。の心境を覚えたことを告白したい。自分の生んだ卵を他の鳥に暖めさすのに似た、大学セミナー・ハウス方式は、お互いにホトギスになることにより、自己の研鑽に、いい知れぬ大きな効能を持つに違いない。

●開館15周年記念講演会 ●昭和55年6月2日 / 有楽町朝日講堂

## エネルギー その過去と未来

これはこれを蘇我・物部論争にたとえておられる。その意味で文科系、理科系合同の今回のセミナーの生産性が高く評価される。

③南北問題解決のために、エネルギー消費量をもっとふやす必要があるか

④エントロピー理論の導入

⑤原子力ほどの程度に安全か

⑥空間的、地域的ギャップ

人間は環境に生きる。しかし、環境は人間に順応するとは限らない。人間は生活の質に対する欲求が環境によって阻害されるのを防ぐため文明を構築し、新しい環境を作る。

しかし、一向に、エネルギーの原点に立至る論議が起つてこない。哲学者が、かかる低俗なテーマに没することを探しとしない、ということもあるかも知れない、基礎科学者が、このテーマに、格好の研究素材を見出すに至っていない、ということもあるだろう。

◆エネルギーの原義を問う  
横浜国立大学教授  
太田時男

法人ニュース

昭和55年6月6日／丸の内銀行倶楽部

第43回理事会・第26回評議員会

昭和54年度事業報告  
昭和54年度決算報告

寄付行為検討委員会最終報告  
役員人事

【出席者】

△理事▽茅誠司、川喜田愛郎、村井賢長、中村哲、沼田稲次郎、永井道雄、加藤一郎、小谷正雄、麻生平八郎、斎藤鎮男、飯田宗一郎、岡山猛

△監事▽福與正治  
△評議員▽川原栄峰、佐藤朔、三宅彰、平出宣道、村山松雄、諸星静次郎、朝倉孝吉、中川秀恭、鈴木勝（代理坂井健一）  
委任状による者 八二名

理事会・評議員会合同会議のため、評議員会の議案については中村哲氏が議長となり審議が進められた。

冒頭に茅理事長の挨拶のあと、飯田館長から54年度事業報告の中で、特に館長職務に関係ある事項についての総括報告があり、続いて寄付行為検討委員会報告については加藤一郎委員長より、役員人事については茅理事長より、他は岡山専務理事よりそれぞれ説明、質疑応答を経たのち、いずれも委員の可決、承認をえた。

▼寄付行為検討委員会最終報告  
委員長・東大教授加藤一郎氏のもとに早大教授川原栄峰、法政大教授下森定の両氏が委員として、54年7月以降55年5月まで12回の会合を開き、関係者の事情ならび

に意見を聴取し検討の結果、つぎの結論をうるに至った。

(1)関係者の意見の中には、館長の権限を拡大する方向での明確化および事業の拡張のための寄付行為の改正を主張するものと改正すべきでないとするものがあつた。(2)本委員会としては、現時点では改正の必要がないとの結論をとる。(3)その理由としては、館長の権限を第4条および第16条で、本人の営む事業のうち「教育、学術、文化に関する活動の企画、編成を統括し、その実施を指導する」と明示しており、「セミナー・ハウスの設置および維持運営」「その他この法人の目的達成に必要な事業」を営む理事長―専務理事のいわば経営実務の権限との間に、緊密な協力を前提としての機能の分化を考えたものであつて、これは今なお適切な規定だと判断する。(4)右の規定は本法人の営むアカデミックな活動に専念する、いわば理念的指導者としての館長の地位をむしろ高めるものである。

なお検討の過程の中から、つぎの問題点の指摘と提案が委員会から示され、その具体化については常務理事会の検討に任された。

(1)「共同セミナー委員会内規」および「国際プログラム委員会内規」の中、委員の委嘱に関する項の一部改定。

(2)右の委員会と別に、大学セミナー・ハウス全体の運営や将来計画などの理事長の諮問機関とし

て、新たに運営委員会の設置。  
(3)館長および専務理事の定年制（七〇歳）の実施。ただし現任者は適用よりはらず。

昭和54年度事業報告  
昭和54年度決算報告

具体的内容については前号掲載の「大学共同セミナー白書」と本号別掲の「収支決算書」と「業務白書」に記すとおりである。

54年度は燃料費の大幅な値上りなどもあり経営上の苦心もあつたが、利用目標五万人に対して、五万三、四三七人の実績をあげることができ、諸経費の節約と相まって未払金の精算と若干の次期繰越を実現できたことは幸いであつた。

ただ懸案の諸施設の改修工事のかなりが55年度以降に持ち越され、当面の急務になつてゐる。

役員人事

茅理事長より、任期満了に伴う役員人事に関する原案の説明があり、協議の結果、つぎのとおり決定した。

◆新任理事

早稲田大学総長 清水 司氏

◆退任理事

昭和55年度共同セミナー委員会

茅新館長のもとで初顔合わせ

本年度委員会は、別記のとおり新任委員に七名、再任委員五名、留任委員一〇名を加えた二二名で発足、第一回委員会は次の一四名の出席の下に開催された。

岡宏子、野田春彦、山岸健、黒田道雄、熊坂教子、阿久津喜弘、富塚文太郎、馬場伸也、岡野加穂留、小田晋、島美喜子、原田敬一、

専修大学総長 相馬勝夫氏  
前国連大使 斎藤鎮男氏

◆再任理事

退任理事二名を除く二三名

◆新任監事

国際基督教大学長 中川秀恭氏

◆退任監事

前成蹊大学長 福與正治氏

◆再任監事

電気通信大学長 平島正喜氏

ついで理事長、館長、専務理事、常務理事の選出にうつり、茅理事長より原案の説明があり、若干の質疑応答を経て、全員の承認、決定をみた。

理事長（再任） 茅 誠司

館長（兼任） 茅 誠司

専務理事（再任） 岡山 猛

常務理事（再任） 川喜田愛郎、村井賢長、中村哲、沼田稲次郎、永井道雄

なお、前館長飯田宗一郎氏を新たに名誉館長に推したい、また理事長の館長兼任はあくまで後任者選出までの暫定的な措置とした旨の理事長発言があり、了承された。また退任の斎藤鎮男氏を顧問に推荐することも承認された。

第一回共同セミナー委員会  
昭和55年7月18日／私学会館

前田愛、峰島旭雄。

冒頭、茅誠司理事長より挨拶があり、去る6月の役員人事の結果、暫定的に館長を兼務することになったので協力してほしい旨の要請がなされた。ついで前年度にひきつづき委員長に岡宏子氏を推したい旨の提案がなされ、全員の賛成によって岡氏を委員長に選

飯田宗一郎氏

慰勞募金のお願い

前館長飯田宗一郎氏が名誉館長に推されたのを機に、同氏の多年にわたる功勞に感謝するための募金が千人会有志を中心に発起され、来る10月25日の開館15周年記念式典の折に贈呈すべく、茅誠司、永井道雄、新保信一の三氏が世話人として目下、ご協力をお願いしております。右の趣旨にご賛同下さる方には左記の要領にてご協力下されば幸いに存じます。

記

一、目的 飯田宗一郎氏慰勞金

一、金額 一口五千円、ただし口数、金額の多少にかかわらず、ご随意に願います。

一、締切（第二次） 昭和55年12月25日

一、送金方法 銀行の場合は住友銀行北野支店、口座番号普通515093、郵便局の場合は郵便振替で口座番号東京5174590財団号東京5174590財団

法人大学セミナー・ハウス

なお通信欄に「飯田宗一郎氏慰勞募金」と明記のこと。

お問合せは当ハウス総務課に願います。

（専務理事 岡山猛）

出、規約により岡委員長の指名とおりに野田春彦、山岸健両氏が同じくひきつづき副委員長に全員の賛成をえて選出された。

次に、第109回、第110回大学共同セミナーの実施報告がそれぞれ野田副委員長、企画室主事からなされたあと、主要議題の本年度下期における企画および実施計画についての協議に入り、活発な話し合

のすえ、以下の決定をみた。  
 第11回「転機に立つ平和と人権」  
 (10月24~26日) 運営委員馬場伸也、坂本義和の両氏。開館15周年記念セミナーとし、飯田前館長の功勞に謝する意をこめ、25日に式典および記念パーティをはさむ。  
 第12回「サルトルと現代思想」  
 (仮題) (12月12~14日) 小松茂夫委員に相談して企画室で立案。  
 第13回「個性と創造性」(仮題)  
 (昭和56年1月9~11日予定) 正副委員長が中心になり立案。  
 なお席上、岡委員長から、飯田名誉館長には今後ひきつづき

飯田宗一郎氏を名誉館長に

理事長 茅 誠司

去る6月6日銀行倶楽部で大学セミナー・ハウスの理事会と評議員会が開かれたが、丁度この日、理事長、館長の二年の任期が満了で、その改選が行われた。その結果、理事長は再任となったが、館長は飯田宗一郎氏が退いて理事長である茅誠司が選ばれた。茅誠司は理事長、館長という二つの重職を引受けることになったが、適当な方が見付かるまで暫定的にという条件の下でこれを承諾した。また飯田宗一郎氏はその席で名誉館長に推薦された。  
 この様な事をこのニュースで報告しなければならぬ事は誠に残念でならない。また理事長の職にあった私としては最終的にこの様な結果を避ける事ができなかった事について重大な責任を感じる次第である。  
 何故この様な結果を招来したか

- その企画・運営に参画してもらいたいとの動議が出され、全員の賛同をえた。  
 【55年度共同セミナー委員】  
 (就任順、敬称略、○印新任)  
 △委員長 宏子 聖心女子大教授  
 △副委員長 野田 春彦 東京大教授  
 山岸 健 慶応義塾大教授  
 △委員 黒田 道雄 成蹊大教授  
 友部 直 共立女子大教授  
 板垣 雄三 東京大助教授  
 熊坂 敦子 日本女子大教授

- 小池 滋 東京都立大助教授  
 阿久津喜弘 国際基督教大教授  
 今井 義夫 工学院大助教授  
 小松 茂夫 学習院大教授  
 杉原 泰雄 一橋大教授  
 富塚文太郎 東京経済大教授  
 馬場 伸也 津田塾大教授  
 森田 桐郎 東京大教授  
 ○岡野加穂留 明治大教授  
 ○小田 晋 筑波大教授  
 ○島 美喜子 東京女子大教授  
 ○原田 敬一 千葉大教授  
 ○前田 愛 立教大教授  
 ○峰島 旭雄 早稲田大教授  
 ○宮田 登 筑波大教授

を詳しく説明することは避けた。しかしその大学セミナー・ハウスが、その創設の時代を終って定常的な運営の時代に入ってきた現在では、創設時代みたいに飯田宗一郎氏の考え通りにはいかなくなってきた面があるのも事実である。これからの大学セミナー・ハウスは、創設者の志を受けつぎながらも、関係者・職員一同のより幅ひろい参加と合意と協力によって運営されなければならない。われわれの当面するこうした問題について、私と飯田氏の間で何回となく意見の交換をし、打開策も話し合ったが、こういう結果になっ

てしまった。  
 大学セミナー・ハウスの創設よりも数年前から、飯田氏は非常な熱意をもって自分の理想実現に努められ、稀に見る成功を収められたことは誰しも認めているところである。故大浜信泉氏や上代たの氏と共に私も及ばずながら協力して来たので、飯田氏の熱意と功績に対しては深く敬意を表し、セミナー・ハウス館長としてその理想の実現にさらに永く努力して頂くことを深く願っていたが、遂にこの結果になったことは、心情において忍びないところである。しかし、このセミナー・ハウスの一番中心の事業である大学共同セミナーについては、従来通り岡宏子先生を委員長、野田春彦、山岸健の両氏を副委員長として運営され、飯田氏にもこの委員会の仕事に引続き協力して頂くことになった。従ってこのセミナーは従来からの線上に引続いて運営されて行くことであらう。  
 飯田宗一郎氏のセミナー・ハウスに対する功績は極めて大きいので、大学セミナー・ハウス開館十五周年記念式典(10月25日)に当って氏に名誉館長の称号と、千人会員等の好意による募金を贈呈する予定である。

昭和54年度経常部収支決算書 (54.4.1~55.3.31)

昭和55年度経常部収支予算書 (55.4.1~56.3.31)

収入の部		支出の部		収入の部		支出の部	
科目	金額(円)	科目	金額(円)	科目	金額(円)	科目	金額(円)
基本財産運用収入	129,983	人件費	93,531,588	基本財産運用収入	250,000	人件費	113,115,000
事業収入	135,132,184	法人諸費	691,179	事業収入	144,457,000	法人諸費	1,530,000
舎収	102,877,490	事務費	10,331,252	泊収	110,390,000	事務費	13,664,000
施設収入	22,932,066	土地建物費	8,306,474	施設収入	23,467,000	土地建物費	14,604,000
食堂収入	9,322,628	事業費	56,096,640	食堂収入	10,600,000	事業費	67,002,000
施設改修協力金	6,071,600	一般事業費	8,290,358	施設改修協力金	9,579,000	一般事業費	9,052,000
収入	6,071,600	学生指導セミナー	11,985,125	収入	9,579,000	学生指導セミナー	11,068,000
協力会員校会費	41,850,000	普通セミナー	31,870,448	協力会員校会費	41,850,000	普通セミナー	43,382,000
収入	41,850,000	国際プログラム	3,950,709	収入	41,850,000	国際プログラム	3,500,000
補助金等収入	17,325,000	固定資産取得支出	6,126,139	補助金等収入	16,904,000	固定資産取得支出	20,450,000
学術援護会	14,457,000	長期未払金返済	10,000,000	学術援護会	14,904,000	長期未払金返済	2,000,000
日本国際教育協	2,868,000	積立預金支出	26,000,000	日本国際教育協	2,000,000	積立預金支出	2,000,000
寄付金収入	1,528,024			寄付金収入	1,500,000		
セミナー会費収入	5,232,400			セミナー会費収入	5,975,000		
学生指導セミナー	4,306,000			千人会繰入金収入	4,000,000		
国際学生セミナー	926,400			雑収入	3,350,000		
千人会繰入金収入	2,878,434			修繕引当積立預金	4,500,000		
雑収入	5,265,428			取崩			
前期繰越収支差額	9,498,149	支出合計	211,083,272	計	232,365,000	計	232,365,000
収入合計	224,911,202	次期繰越収支差額	13,827,930	前期繰越収支差額	13,828,000	合	246,193,000
				合	246,193,000	計	246,193,000

昭和54年度 業務白書

年間利用者初の五万人台

昭和54年度の宿泊延人数は、表1に示すとおり、五万三、四三七人を数え、前年度つくられた最多記録四万八、五三九人を四、八九八人(一〇〇%)上回る新記録となり、当ハウス開館以来初めて五万人の大会に到達することができた。宿泊実人員も年間三万一、〇二三人と初の三万人台をマークしている。これで、一人でも多くの方々に利用していただくため、物価上昇の中で利用料金を据えおきにし、利用者増によって支出増をカバーしたい、との願いに基づいて立てられた年度当初の目標も達成された。

利用者の種別、会員校の利用

以上の利用状況を利用者別で見ると、表2のとおりであるが、協力会員校のゼミ回数、宿泊延人数は、ともに前年度より増え、開館以来最も多い数字となっている。会員校の連帯の中に運営の基盤をもつ当ハウスとして、喜ばしいことである。

ちなみに今回は、利用の多かった一五校を表3で紹介することにした。本年度は東京大学と東京都立大学の二校がともに利用回数五九回で最多利用校であるが、前者は二年連続一位、そして以上二校に早稲田大学を加えた三大学がこのところ六年連続して上位三校となっている。宿泊延人数では早稲田大学が五年連続最多利用校である。これに今回は新しい視点からの統計を加えてみた。同じく表

3に示した籍生一〇〇人当たりの当ハウス宿泊延人数である。東京都立大学の場合には一〇〇人中延にして四一人が利用したことになり、かりに一人当たり平均泊数を一・七泊とすれば、一〇〇人中年間二四人、すなわち四人に一人が当ハウスを利用していることになる。同じ「ベスト3」に入っている東京大学もここでは一三位で一〇〇人中延九人、早稲田大学は一〇〇人中延四人という数字になる。

年間宿舎稼働率は五五・三%

前記本年度の宿泊延人数を宿舎の利用率(稼働率)に換算すると、年間(稼働日数三五八日)の平均は五五・三%(前年度対比三・三%増)となる。あくまでも統計的数値であるが、これによって年間の利用状況を「一日おきに満員の盛況」と見ることも、「今日は満員でも明日は利用皆無(あるいは一〇〇日中五五日は満員でも残り四五日は利用ゼロ)」と見ることも可能である。いずれにしても週末や春から夏にかけての予約状況から「セミナー・ハウスはいつも満杯」というイメージがかりに利用者の間にあるとすれば、右の数値によって修正していただき、今後は週日(あるいは日曜午後から)の利用、そして利用率が年間の平均を下回っている月(特に10・11・1・2各月)の当ハウスの一層のご活用についてご検討いただければ幸いです。

〔表1〕 月別利用状況

月	ゼミ回数	宿泊延人数(人) ( )内は前年度数	定員比 (%)
4	113	5,032 (4,046)	62
5	90	4,886 (4,581)	58
6	64	4,151 (3,259)	51
7	103	4,843 (5,358)	58
8	92	6,659 (4,387)	80
9	130	5,625 (5,066)	69
10	90	3,652 (3,894)	44
11	105	3,632 (4,188)	45
12	122	4,408 (3,580)	60
1	58	1,634 (1,578)	22
2	121	3,869 (3,733)	49
3	112	5,046 (4,869)	60
計	1,200	53,437(48,539)	55.3
月平均	100	4,453 (4,045)	55
1日平均	3	149 ( 135)	

利用者のための交歓プログラム

最後に、大学の共同の広場である当ハウスには「コミュニケーションの生活」があり、各大学の枠を超えた教師・学生の交流・交歓の機会が設けられているので、そのような活動の概況にも触れた。

〔表2〕 利用者別宿泊人数・ゼミ回数 ( )内は前年度数

	ゼミ回数	比率 (%)	宿泊延人数 (人)	比率 (%)	1団体平均 実人数
会員校	742 (717)	62	25,791(23,537)	48	23(22)
非会員校	169 (209)	14	5,996( 6,016)	11	46(44)
大学連合	36 ( 30)	3	4,505( 3,549)	9	55(57)
学会・教育団体	93 ( 88)	8	7,774( 8,284)	15	41(43)
官公庁・経済団体等	160 (153)	13	7,632( 6,832)	14	27(27)
個人	—	—	1,739( 321)	3	—
合計	1,200(1,197)	100	53,437(48,539)	100	26(25)

〔表3〕 会員校利用状況

順位	校名	ゼミ回数	順位	校名	宿泊延人数	順位	校名	在籍学生100人当たりの宿泊延人数
1	東京大学	59	1	早稲田大学	1,752	1	早稲田大学	41
1	早稲田大学	59	2	早稲田大学	1,670	2	早稲田大学	39
2	早稲田大学	56	3	早稲田大学	1,545	3	早稲田大学	22
3	早稲田大学	49	4	早稲田大学	1,464	4	早稲田大学	19
4	早稲田大学	41	5	早稲田大学	1,448	5	早稲田大学	17
5	早稲田大学	30	6	早稲田大学	1,090	6	早稲田大学	16.4
6	早稲田大学	29	7	早稲田大学	998	7	早稲田大学	16
7	早稲田大学	27	8	早稲田大学	939	8	早稲田大学	15
8	早稲田大学	26	9	早稲田大学	883	9	早稲田大学	14.4
9	早稲田大学	26	10	早稲田大学	867	10	早稲田大学	13.5
10	早稲田大学	25	11	早稲田大学	833	11	早稲田大学	13
11	早稲田大学	23	11	早稲田大学	833	12	早稲田大学	9.7
12	早稲田大学	21	12	早稲田大学	714	13	早稲田大学	9.1
13	早稲田大学	20	13	早稲田大学	577	14	早稲田大学	9
13	早稲田大学	19	14	早稲田大学	555	15	早稲田大学	8.7

また、一昨年宿舎村の中央に加えられた交友館サロンも、ゼミの合間のコーヒー・ブレイク、コンパ、学会や研究会のパーティ、在泊グループ相互の懇親などで、年間を通してよく利用され、日常的な交流・交歓の場としてすっかり定着してきている。



空から見た大学セミナー・ハウス・キャンパス

# 特集 開館15周年を記念して

岡 今日日は「開館十五周年を迎えて」の座談会というわけですが、創設者でもあり、これまでずっとご自身がいわばこの大学セミナー・ハウスの心であり形であり、といった活動をつづけてこられた飯田さんはもちろん、その草創期から参加され、第一回の共同セミナーの運営委員長をされ、現在も常務理事としての役割を果たされている永井さん、ユニークなセミナー・ハウスの構想にふさわしい場をつくらうという、これまたユニ

## 座談会

### 創始の心

そして

これから

●大学セミナー・ハウスの  
初心を想う

ークな設計を担当された吉阪さん、ご自分のゼミで利用されるばかりでなく共同セミナーの活動に長い間、大きな協力をされ、こんど新しく運営委員の一人となられた宇野さん、どなたもいろいろな意味でこの大学セミナー・ハウスとご縁の深い方たちのお集まりです。

ところで、これからの話合いの内容ですが、大学セミナー・ハウスの創設時の活動や今までの活動の表の上にあらわれている足跡は、もうすでに何回か語られ出

版もされていますので、今日はもつとカミシモをぬいだ自由な形で皆さんそれぞれのお立場から「大いに語る」といった具合にお話いただきたいと思います。

そんな、いわばぎっくばらんなお話のなから、創立の心や草創期の思い出や苦心談、そしてその発展や現在の問題点などが、うかがえたらと思います。

まず飯田さんから、この大学セミナー・ハウスをつくられた、そもそもその発想あたりから、いかが

飯田 宗一郎  
大学セミナー・ハウス名誉館長

吉阪 隆正  
早稲田大学教授

永井 道雄  
上智大学教授

宇野 重昭  
成蹊大学教授

司会 岡 宏子  
聖心女子大学教授

でしょう。

正史とは別に……

飯田 どういう動機でセミナー・ハウスをつくることを考えましたかという質問を私は、よく受けるんです。五年ほど前に『大学を開くー創立十年・開館七年史ー』（昭和49年・当法人刊）を書いた時にも、手塚富雄先生から、これには表向きのごことが書いてあるけれども、もう遠慮なしに、心の機微にあるもの、根本の動機みたいなものを書いてほしい、そうでな

いとセミナー・ハウスの本當の精神は生きた形で伝わらないよ、といわれたことがあります。同じように、創立十年史を読まれた和歌森太郎先生や、色川大吉先生からも、正史としてはこれでいいが、正史とは別に……と内面的な人間史を書きなさい、いつの日かセミナー・ハウスの灯火が消えかかるといわれる時、灯火をふきかえすための一つの目安にもなるんだから、といわれました。ただ、これははなはだ個人的なものになるし、いつかは書き残さねばとは思っているんですが……。

岡 それぞれ、そのところを話していただきたいんです。いわば正史なるものも書かれていくので……。

飯田 すこしオーバーな言い方になりますがけれど、十三、十四、十五歳ぐらいのころに、セミナー・ハウスのようなことを考えたと思いますよ。

宇野 ほお！

岡 そんなところからなんですわ。飯田 それはね、私の生まれた茨城県の筑波山の西北の小さな町で、クエーカーの宣教師夫婦が宣教を開始しました。そして新渡戸

稲造といった、えらい人が東京からいらつしやるわけですよ。そういう時に私のような中学生までが夕食によれば、大先生とテーブルを共にするわけです。そうした時に宣教師たちの開かれた心とか、人をもてなすホスピタリティとかいうものを教えられました。人間というものは、出会うことによつて、国籍の別なく楽しく交わることができるといふ印象を私の心のなかにいつの間にか植えつけ



右より永井、飯田、吉阪の諸氏

られたんですね。それですから私は開かれたところとか人をもてなすことが好きです。狭いところにいるのが嫌いなんです。狭いところ定したワクにしばらくられない、開かれた発想、進取の気性、創造の精神というものをアメリカの宣教師の生活態度から学んだようです。このころにはごくまれた内なる幻想が後日発展してセミナー・ハウスの構想に至ったと聞いていいように私には思われます。

岡 そんなご体験、人とのふれ合いの意味や楽しさ、人を選ぶこと、もてなすこと、などについて心をゆりうごかされたことが現在、セミナー・ハウスでの飯田さんのあの「いらっしやい」という態度につながるんですね、いまのお話からなるほどなるほどっていう気がします。

永井 ぼくは、その十三、四歳のころからっていう話、前にきいたことあるな。また、新島襄が群馬県、飯田さんが茨城県、そんな親

近感もあって、新島のつくられた同志社にあこがれて入学した話も飯田さんからきいたことを思い出しました。若い時代にアメリカの宣教師に接したことも重要な意味があるけれども、新島先生が飯田さんを動かしたんだという言い方もできるんじゃないかなと思うんです。

一大学のワクをこえて

岡 心のなかの芽としてはそこまでしかのぼるとして、具体的にはそこからどんな展開をするのですか。



飯田 大学を出てから同志社とか東京女子とかのIIC部門で働いて

いたけれども、どうもそうした一大学のワクに私自身はまらないんですよ。戦後の大学が大衆化していく過程のなかで、学生生活がだんだん孤独と寂寥にむしばまれていくように見えてならない。教師と学生との間にもっと開かれた心の交流がなければならぬ、何か既成の大学のワクをこえたもの、そんなものの必要がおぼろげながら見えてきたんですね。

ところで、その時代に当然あるべくしてないものは何なのか、それを見つけないと、それが創造だしと思う。そして、その観察したもののが現実の社会でどんな反応をおこすか、その勘が大事です。勘があたるためには経験と見識と善意が必要なわけですよ。具体的には事を起こすにあたって、私を

理解し力になっていただく人に出合わなければならぬ。その意味では私は私の人生五十年を準備期間と見たわけですよ。そして私なりに五十年、いろんなことをやりながら、自分というものをつくったつもりです。さて五十歳になった時に、私を信頼してくれ人はいくらだらう。あの男の技倆と実績、あの男の生活態度から判断してあれなら信頼してやらうと言ってくれる人を協力者にしなければならぬわけですよ。その第一番目に私は上代たの先生を選びました。先生は以心伝心、直ちに賛同してくれました。ついで、茅誠司、大浜信泉両先生の協力を仰ぐことになりました。

それからペーパー・プランが地上に実現するためには、資金が必要なので、お金を集めなければなりません。心がぎれい、力があるって、約束したことはかならずやってくる財界人はだれだらうというので、よく調べました。その時に三井銀行会長佐藤喜一郎氏だろうねとて教えたくれたのが現経団連副会長の花村仁八郎さんだったんですよ。そこで下準備ができたところで茅、大浜両先生と共

に佐藤さんを訪ねました。幸いですが佐藤さんで、一大学の募金なら協力しないが、どこの大学でも利用できる開かれた施設のためならということ協力を約束されました。

そんなことで、私にとっては五十歳が停年だったわけですよ。それから、独自の使命に生きる開拓者の人生が始まるわけですよ。岡 飯田さんはさつき観る力とか勘とかおっしゃったけれども、こ

れはほかの人にもないことはない。むしろそれを実行に移すという行動力との直結が飯田さんの飯田さんたるゆえんのように思えますよ。永井 それはまったく同感、本当におどろくべきものですよ。吉阪 ブルドーザーというあだ名がありましたよ。(笑)

魂を仏の像に……

岡 まさにブルドーザーが動きだす、その草創期に吉阪さんがお加わりになったのですか。吉阪 お会いしたのはもう少しあとですね。大浜先生から誘いをうけてから。

飯田 構想が煮つまってからですね。

岡 その煮つまってきた構想を形であらわすっていうのは、大変だったでしょうね。魂を仏の像にするっていうわけ……。

飯田 いやあー実はその前に、ある建築会社の設計部にたのんだことがあるんです。

岡 それが、魂にあった仏ではなかった……。

飯田 そう、私の頭にあるものが図面にあらわれて来ないわけですよ。まあ、一般の通念だらうけど、あたりまえの大学の寮とか会社の寄宿舎とかいうものしか頭にないでしょう。こちらの考えている理念がすこしも設計に生かされていないわけですよ。交流するとか、もてなしをするとか、先生と一緒に学問をするとかいったね。日本の大学はレジデンシャル・カレッジじゃないですから、先生のほうも学生と一緒に泊まりながら学問をするという訓練をうけて

いない。三日でも四日でも、それを経験してほしいと私は考えていたわけですよ。先生と学生がたのしく話ができるというのは、泊まるからですね。もう一つは、吉阪さんにお願したことですが、それぞれ固有の大学からどのくらい離すかということですね。あまり近くても遠くてもいけない。わが大学のキャンパスから、だいたい一時間半とか、距離にして五〇キロとか六〇キロの周辺だと、わがキャンパスの一つの付属としてそこに生活がありうる。そういう距離にあることがセミナー・ハウスの立地条件だということですね。

これは、セミナーとどうあるべきか、考えに考えたことで、単に静かだからいいというものではない。大学から逃げ出すということでもなく、キャンパスの延長として考えたつもりです。それで八王子の土地を見つけたわけですよ。岡 よく、あの土地がありましたね。

飯田 まだ車のすくない時なので、私は八王子市役所の企画室の方の自転車にのせてもらって、多摩丘陵を探しました。

岡 そのころはまだ文字どおりの野猿峠だったでしょうからね。(笑)

吉阪 ものを見つけないということですが、私も設計の上でも、発見の方法ということもいつも言っている。何が尊いのか、いつもものを発見する努力をながしろにしているわけですね。

設計を依頼されて

永井 設計を依頼されたのはいつごろになりますか。





岡(左)、宇野の両氏



吉阪 昭和37年暮ごろだったか。私、ちよと南米から帰ってきたばかりで...

は南米の大学では都市社会学かなんかの講義をさせられておっ...
永井 南米のどこですか。
吉阪 アルゼンチンのツクマン大学です。それで建築のほうから入っていったものですから、我田引水というか、人びとが団結するキッカケとなるものは何か。どうもものをつくるというのがたいへん必要なんだ。物理的な意味でいうと一番簡単なのはことばですね。ことばで言うことがコミュニケーションのはじまりで、それがだんだん物質的なものになって、より余計、それが共通項となってくれば団結のものになる。それはい、どういう形をつくってあげたいのかと考えると、実はこれがたいへんむずかしい。それを十分

に認めてもらえる方がほしいと思...
(笑) 絵をかくことはかきま...
吉阪 最初に企画委員会との話合...
宇野 どう説明なさってもですか...
吉阪 なぜ設計料の話など先に...
中全体がだんだん理解するように

なってきて、ありがたいと思っ...
岡 一つにはセミナーの施設の機...
吉阪 最初企画委員会との話合...
宇野 一人一室を考えていたんで...
吉阪 実際問題として何か起こっ...
要だ。それには並んだ部屋よりは...
独立した小さな家だということに...
なり、バラバラにすることを考え...
た。

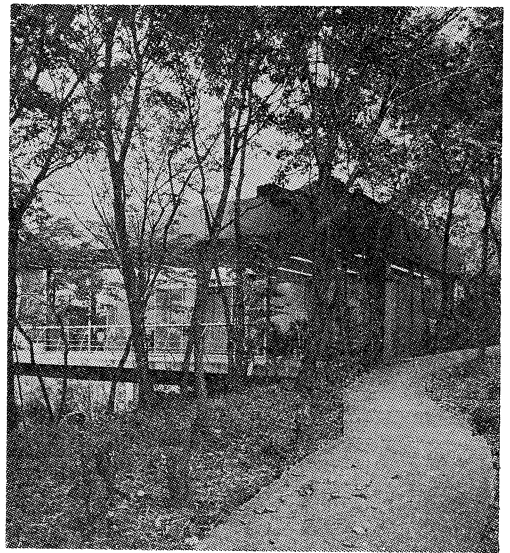


共同セミナーの発想
永井さんはそのあたりからい...
いろいろタッチされたんでしょう。

永井 そのころ私のいた東...
京工大では和田小六先生が...
学長をなさ...
て以来、一般...
教養に力を入れて、これをセミナ...
ー的なものでやろうと大いに意気...
こんで加茂儀一、宮城音弥、遠山...
ろは、お茂儀一、宮城音弥、遠山...
啓、若いところでは衛藤藩吉、鶴...
見俊輔といった人たちがメンバ...
ーにおられた。そしてセミナーなん...
てことばはハイカラすぎるから日...
本語にしたらいいたいことにな...
り、衛藤さんからは「組み分け」...
という案が出されました。(笑)

- △昭和34年V
11・25 セミナー・ハウスの構想を話し合う初会合。上代たの、大浜信泉、茅誠司など九名が参加。
△昭和36年V
7・21 三井銀行会長佐藤喜一郎に建設後援会会長就任を懇請、共鳴をえる。
8・18 財界有志による建設懇談会開催。
11・1 三井銀行本町支店ビル内に設立準備事務所を開設。
△昭和37年V
1・31 建設敷地を南多摩郡柚木村に決定。
3・31 財団法人大学セミナー・ハウス設立が許可、石館守三、理事長に就任。
4・18 第一回理事会を開催。
9・1 『大学と人間—人間形成の新しい方向を求めて—』を発行、設立の理念をうたう。
9・19 建設後援会創立総会を東大徳徳館で開催。
11・20 第一回企画委員会開催。
12・21 設計を早大教授吉阪隆正(U研究所)に依頼が決定。
△昭和38年V
1・21 財団法人創立記念講演会を朝日講堂で開催。
5・15 「大学と人間」叢書をみすず書房より創刊。
6・29 会員校大学教員懇談会、「大学教育セミナー」第一回を箱根で開催。
△昭和39年V
10・1 大浜信泉、理事長に、茅誠司、館長に、飯田宗一郎、専務

大学セミナー・ハウス略年譜



林のなかの大学院セミナー館

め、もっと広い教養の場をつくらうと、週一回ぐらい集まっていたが、チャギヤヤやっていたらね。

そうこうしているうちに、ある時、いろいろお世話になつて、上代先生から、飯田宗一郎という人がおり、同じような考えを持っているから、あんたも協力しなさいと、ご下命があつたように記憶しています。それで企画委員会の第一回は加わつたか後だつたか、飯田さんに誘われて野猿峠の土地を見にいった記憶もあります。

東京工大もそんなわけで衛藤さんというところの組み分け授業をやつており、なかなかそれを誇りに思つていたのでね。ところが、これをより開放的にやるにはこの大学セミナー・ハウスをつかひ、他の大学とも交流したほうがいいかしらと思ひました。飯田さんにお会いしてみると、ただただ驚くばかりの構想力と実行力の持主

で、それからそのキビに付して参加をさせていただいたわけですね。

ところで飯田さん、あのころ箱根にいきましたね。たしか湯本で大々的な会合でしたね。

飯田 各大学からこれと思う教授達にお集まりいただきました。つまりセミナー・ハウスをつかうのは平教授なわけですよ。今までは総長とか学長とかのお世話をいたしていたが、もうここまでプランが出来れば、それを実際に利用してくださる先生方までおろして検討ねがうべきだとの考えからです。

そうすると、そのころのことだから、財界から金をもらえば産学協同とか、ご用セミナー・ハウスになつてダメだとか、なんだかんだ議論がでました。そのころの大学で一番やつかいなのが一般教育ですよ。そしてみんな失敗しているんですよ。それは自分の大学だけでやろうとするからです。も

しこれをセミナー・ハウスでやるならば、単科大学などではとうてい出来ないコースが立派に組めるんじゃないか、と思ひ及ぶに至りました。共同セミナーの構想は当初からあつたわけですよ。まさにこのプログラムが的中して一昨年は一〇〇回を記念したわけです。

岡 それが共同セミナーの発想であり出発点ですね。

永井 まさしくそうですよ。

飯田 それなしにはセミナー・ハウスのバック・ボーンは生まれて来ないわけですよ。私がセミナー・ハウスの構想をもつたのも、戦後の大学教育のそうした欠落部分を見てきたからで、別の言い方をすれば大学のなかでの学生の分離現象、つまり大衆化の結果、いろんな種類の学生が集まつていく。クラブ活動だけが大学生生活だとする学生もいれば、一般教育などいらないという教授もいるといったわけですよ。そうした大学の現状を見てきた私は、わずかに二〇〇人収容の施設であれば、学問と

は何かがわかる教授と学生たちのために、セミナー・ハウスは必要であるに違いないという確信を持つていました。たかだか二〇〇人足らずのセミナー・ハウスにクモの巣がはることはないだろうと思つていたわけですよ。

それにこたえてくださるかのようには丸山真男先生とか大塚久雄先生とか山内恭彦先生とかが、いち早くこの丘の上を利用してくださったのです。これが大学セミナー・ハウスに成功をもたらした大きな理由だと思ひますよ。永井さんまた然りですよ。八王子はどんな人が集まるところか、無言の宣伝

役をつとめてくれたことと感謝しています。

岡 それはやはり人に目をつける飯田さんの勘ですね。

永井 勘ともう一つ、犠牲的精神と実行力ですね。私はそのころ飯田さんを識り、また茅先生にも昵懇になる機会を得、また吉阪さんにもはじめてお会いした。コルビジェのお弟子さんという触れこみもさることながら、あのすさまじい設計図に恐れをなした。(笑)

宿舎、山にのぼる

永井 さて開館当初、本当は各部屋に入るのに、山のぼりの気分にならなければいけないというので、すごい階段がついていたので、そのおかげで第一回の共同セミナーの委員長は閉口しちゃった。(笑)

岡 どんな階段があつたんです。永井 要するに鉄の階段がキューッと曲がついていて。吉阪先生は夢多い人で、なかなか部屋に入れないほうがいんだって言うわけです。(笑)

吉阪 いや、地面をけずつて、ならして、宅地造成して、ということがどうしてもいやで、自然のままの環境を生かしたいと思うから、階段の必要も出てきたわけですよ。永井 それで40年7月、開館の日がまた生憎の雨でドシャ降りだったものだから、ドロドロの道を女子学生がパイパイ、キャアキャア、たいへんだった。吉阪さんの高遠な理想はわかるけれども、こんなではセミナー委員長の仕事にならないので階段だけはなんとかしてくださいと、茅先生に申し入れをいたしましたね。

理事に就任。  
△昭和40年▽  
1・25 ニュース「セミナー・ハウス」創刊。  
7・5 開館式、第一回大学共同セミナーを開催。  
11・1 建築落成式。  
△昭和41年▽  
6・1 「大学セミナー・シリーズ」をみずす書房より創刊。  
10・14 増田四郎、理事長就任。  
△昭和42年▽  
7・10 講堂・図書館落成式、千人会発足。  
△昭和43年▽  
6・29 テニス・コート完成。  
12・7 教師館(松下館)落成式。  
△昭和45年▽  
4・1 高村象平、理事長に、増田四郎、館長に就任。  
5・10 長期セミナー館落成式。  
9・19 第一回大学教員懇談会、「日本における大学改革の反省と展望」開催。  
10・22 開館五周年記念式、大学セミナー・ハウス讃歌を発表、記念論集『西洋と日本』『現代科学と人間』(共に中公新書)を刊行。  
△昭和46年▽  
6・1 大浜信泉、理事長兼館長に就任。  
△昭和47年▽  
3・29 第一回国際学生セミナー「アジアの平和と開発」開催。  
4・1 加藤六美、理事長兼館長に就任。  
11・18 創立十周年・開館七周年記念式挙行政、記念論集『日本人の再発見』(弘文堂)刊行。  
△昭和48年▽  
9・28 米国コルゲート大学、国際協力会員校として加入。



急な階段の両側にあるユニット群

吉阪 それで宿舎から本館まで往つたり来たりしなければ、いらい。往つたり来たりするの、いろんなグループに出合う。そこでお互いに挨拶をしないさい、というわけに宿舎を分散させた。

岡 あれはなかなかいいですね。吉阪 不便なほうがそういう出合いがある。

永井 不便がいいって、本当に不便なだけだ。(笑) やつと野猿峠にたどりついたら、またよじのぼる……。(笑)

吉阪 かえって思ひ出ができていいでしょう。(笑)

永井 これも草創期の思ひ出話のつづきですが、第一回のセミナーの日、日本女子大の学生が多かった。みんな、宿舎で着替えるのだけれども、部屋にまだカーテンがない。開館を急いだあまり、間に合わなかった。宿舎は坂道にあるし、外から見る見えになってしまふ。それで女子学生の代表みたいなのがぼくのところに来て、人権問題だと言ふんですよ。もう一つある。一つか二つかカギのかわらない部屋が出た。カーテンもなくカギもないとなると、あの辺の男性が面白半分、おそろいかもしれないという話になってね、この二つ

でぼくも閉口しちゃった。この時は職員の人たちも必死で、シートをカーテンがわりに窓辺に吊るそうと画ビヨウでとめたり、夜中懐中電灯をもって見廻ろうというところになったり、ひと騒動したものでした。ところが、これら第一回の学生たちはいへん喜んでちゃって同窓会やなんやかんやで、しばらく結束してましたよ。一つの制度がはじまる時で、学生が主役なわけですから、たいへんな感激なんです。

飯田 創立当初というのは完備してないんですよ。ただ私は名前で苦労しましたよ。

岡 まさか、組み分けハウスというわけにもいきませぬね。(笑)

飯田 私もキリスト教信者ですから、レトリート・ハウスとも考えました。しかし、これでは実体があまり表現できそうにない。従来のことばでは、いうことができない概念なので、いまままでに新しいことばをこしらえたわけですよ。セミナー・ハウスという名前は今までどこにもないはずなんです。ところでセンターとしないでハウスとしたのは、泊まる、語る、食べるという生活をセミナーの条件としたからです。そこにはかならず

ず人を迎えて、もてなすホストがいなければならぬ。ホストなくしてセミナー・ハウスはありえない。名は体を表わすというから、ずいぶん苦労し考えぬいたつもりです。

岡 本当にズバリ、いい名前をおつけになりましたね。

飯田 それからインター・ユニバーシティというこぼも、インター・カレッジということばがあるからいいだろうというところで決めました。

吉阪 ケダモノの巢と人間の巢の根本のちがいは、接待する、人をもてなすことなんですよ。

岡 なるほどね、「いらっしやい」という、あのことばね、これはセミナー・ハウスの精神として一貫して生きていますね。やはり、人間の巢なんですね。

生活は簡素に、思想は高潔に

宇野 「生活は簡素に、思想は高潔に」というセミナー・ハウスの標語ですが、



「生活は簡素に」という時、どんなイメージだったんですか。

飯田 ぜいたくはほしくない。ただし貧乏くさいのはいけない。簡素とは日常性を離れぬこと、したがって豪奢はいけない。ただし服装でいえば汗くさくてはいけなし、食事ではシャワーを設けなければいけないし、食堂にはかなり重きを置いたつもりです。

永井 このことばは安部磯雄先生もよくつかわれたスローガンだけれども、これは同志社から出たものですか。

飯田 いやいや、あれはワーズワースの詩の一節を採ったもので、実はこのことばのあとの部分が重要なんです。国民が偉大で自由であるためには高い思いをもたなければならぬ、それは魂によってのみ、というくだりです。これを私に感銘をもって教えてくださったのは英文学者の斎藤勇先生です。軽佻浮薄な風潮を戒めるよいことばです。

これを標語に採用する場合、普通に訳せば「簡素な生活」となるけれども、これでは弱い。これをひっくり返して動詞にすればグッと強くなる。そうやって教えてくれたのが丸山真男先生なんです。実は丸山真男訳というわけなんです。ですから標語ひとつをつくるにも、いろんな先生のお知恵をお借りしたわけです。

岡 考えて、考えて、考えぬいて、その構想をまた一つ一つ実際の活動によって具体的に表現していく、たのしい仕事だったでしょうね。苦しみはあったかもしれないけれども。

飯田 それは無限にたのしかったんです。苦しかったんですけどね。なにしろ金が無い。そこへもってきて設計料を払えという。(笑)

岡 でもね。飯田さんのお気持ち打たれたからタダで設計しやろうなんていうって、魂を仏にあらわしてくれない設計者よりは、設計料をくれたっていわれども、ちゃんと魂をそのまま形に表現してくださる設計者に出合えてよかったですね。

飯田 そうそう、あまり仲よしク

12・1 野外ステージ竣工祝い。  
△昭和49年▽  
2・15 正田建次郎、理事長兼館長に就任。  
5・14 「学生年輪の会」発足。  
6・1 飯田宗一郎、館長に就任。  
12・25 「大学を開く」創立十周年開館七周年史」刊行。  
△昭和50年▽  
6・27 大学院セミナー館・遠来荘(多摩民家)落成祝い。  
7・27 千人会員、千人を突破。  
11・15 開館十周年記念論集『東洋文化と日本』(ベリかん社)刊行。  
△昭和52年▽  
4・1 本法人、試験研究法人の指定を受ける。  
6・9 川喜田愛郎、理事長就任。  
△昭和53年▽  
3・4 第一回学生年輪の会の集い「大学と人生」社会に巣立つ人のために一開催。  
5・27 交友館落成式。  
6・24 国際セミナー館落成式。  
10・1 「大学共同セミナー100回の歩み」刊行。  
10・8 大学共同セミナー第100回記念の集い。  
10・20 開館以来の宿泊延人数50万人達成。  
△昭和54年▽  
4・6 茅誠司、理事長に就任。  
6・23 第一回大学院共同セミナー「諸学の系譜と真理愛」方法論の再検討」開催。  
7・2 岡山猛、専務理事に就任。  
△昭和55年▽  
6・2 開館十五周年記念講演会「エネルギー・その過去と未来」を朝日講堂で開催。  
6・9 茅誠司、館長を兼任。飯田宗一郎、名誉館長に推される。

ラブになっちゃ、ダメですよ。永井 割に安い設計料だったんじゃないかな。吉阪 設計料はいただきます。そのかわり、これだけ寄付させていただきます。そういう形をとってくださいます。そんなふうな話合いがあり、気持ちよく話はすすんだように記憶しています。

設立の頃―利用者として

岡 さて、最初の設立の精神というものが、だんだん年月が経つて来ると、どう



してもそこに何かの変化がおこる、発展とともに伝承していくことにも問題が出てきがちですけれど……。宇野さんそのあたりのことはいかがですか。宇野 そもそも出来た時、あの設立の精神が世の中にアッピールしたというのには、それなりに歴史的課題にこたえたわけでしょう。ある意味では普遍的な問題が基盤にはあっても、時代性というものが大きかったと思うんですね。これは私の勝手な想像ですけども、この十五年の歴史は設立された方がたが想像された以上に成功したんじゃないでしょうか。岡 宇野さんはかなり早くから関係をもたれたのでしょうか。そし

て、この変化とか伝承の問題を身をもって体験されてこられたのではないかと思います……。宇野 すこし勝手なことかしらべらしていただきます。最初、私は利用者として現れました。なにしろ飢餓助教授としてですね。(笑) 永井 何年ごろですか。宇野 たしか最初に来た時に図書館、講堂が出来あがっていました。飯田 43年、三年目ですよ。宇野 そのあと、例の日韓合同セミナーがあり、指導教授として参加しましたが、非常に刺激になりました。韓国の人たちが自分たちの主張、自分たちがいかに日本人

大学共同セミナー―主題15年の歩み

(数字は回数を示す)

- 昭和40年度 1 世界の中の日本
- 2 現代思潮と日本
- 3 科学と宗教
- 4 「新日本のビジョン」とその批判
- 昭和41年度 5 英国のキリスト教文学
- 6 大学の理念と現実
- 7・8 実存思想と現代―現代に生きるために―
- 昭和42年度 9 大学と人間
- 10 世界的にみたヨーロッパと日本
- 11 日本の思想
- 12 14 現代人とキリスト教思想
- 13 14 出合いと決断―
- 15 大学と社会―講演に視野を
- 昭和43年度 16 音楽と社会
- 17 16 学問と人生―大学と現代人の課題にふれて―
- 18 平和と人権
- 19 20 ヨーロッパとは何か
- 20 19 コンピュータ時代の人間―職業と人間観の変化―
- 21 22 大学と社会―現代を考える―
- 昭和44年度 23 ヨーロッパとは何か
- 24 23 大学と人間―現代を考える―
- 25 26 日本人とは何か―日本人の思想成立―
- 27 一九七〇年代の都市問題―ニュータウンの再開発の検討―
- 昭和45年度 28 現代文明の諸問題―新しい世界観の視座を求めて―
- 昭和46年度 36 学問と人生―大学における出合いの意味―
- 37 自己とは何か―セーレン・キルケゴールの思想を手がかりとして―
- 38 人間と環境―公害の現状と展望―
- 39 地域調査
- 40 41 日本と中国
- 昭和40・55年度 29 大学と人間―未来にかける「わたし」の発見―
- 30 再検討―近代の日本文学
- 31 学問における創造とは何か
- 32 31 社会と交通
- 33 思想の主体性―キルケゴールとがき―を中心に―
- 34 進化と適応
- 35 34 社会化としての発達
- 36 専門職と国民の生活

に痛めつけられたかといった体験の継承を必死になって訴えるものだから、日本人学生がたじろいでしまっただけです。まずその経験自身がほかでは得られない経験でした。あのあとですね、松下館(教師館)が出来上がるのは。飯田 そうですね。

宇野 日韓合同セミナーのあと、新入生歓迎セミナーとか共同セミナーとかで私が深く関係してきた時期が、ちょうどあの大学の問題、改革の問題がたけなわの時期なんですね。正直言いますと、最初、私の場合、セミナー・ハウスはすごくこう、思想のメチャクチャ、ゴツチャゴツチャのところのように思われました。私は、高校、大学時代、戦後日本がちょうど右

と左に思想を明確に分けて、なにかこう、本質還元論的で、だれもかれも皆カチツと区分けされているような時代に精神成長期を送りましたので、そういう見方からすると、セミナー・ハウスには全然、革新性がないし、メチャクチャみたいだし、メンタリテイはなにかクラシックな大正デモクラシーのようだし、ですから、ここに来て、革新系の仲間から裏切者にも見られやしないか、あまり深入りしないほうがいいかな、といった印象をもったものです。

設立の理念と状況 永井 さっき飯田さんがおっしゃったように、全く初めの参加者にならした懸念をもつ人が多かったです。とくに箱根の集会ではそうしたセミナー・ハウスの革新性の限界についてかなりの論議がなされ、ある種の疑念を相当数の人び

とにいだかせたことも事実でしたね。飯田 手塚富雄先生などからは、飯田さんはよくがまんしたねなんて、慰められたもんです。盛んに攻撃を受けるわけですよ。その時に、手塚先生が、これはあくまで飯田個人がやりたいというのだから、本人の意志がある限りやらせるべきで、協力できない人はやめたいいいじゃないかといった意味の発言をなさり、反対意見を押さえてくださったわけですよ。

宇野 結局、やる気がある人間が集まって来るところなわけですね。私は最初、人間的ふれ合いとかなんとかいうものは古いブルジョアの観念と思って……(笑)、条件反射的反撥をしていたのですが、ここで思想の全く違う人間にふれて、出合いのおもしろさ、生産性といったようなものを再確認させられました。時代性をこえた普遍的な問題に心をひかれはじめたのはそこからです。私たち若い教師が、これから具体的に学生をどう教育したらいいのか、悩んでいた時ですから。その時、一つの心棒というか方向性といったようなものを与えられた気がいたりました。それで私もすこしやる気になり、できる協力すこしやるというところになったわけですよ。

岡 そうしたことは指導教授の側にもあるし、集まってくる学生にもあったんですね。はじめはなんの気なしに来た学生も、来てはじめて、大学教育にない何かをここで感ずるんですね。

宇野 制度化されたり組織化されたり死んでしまうものが、ここには生きています。



を集まってくる人びとに与えるところが、なにか特別のパーソナリティをもっていらいっしやると思うんですね。やはり長い間に培われた天性なんでしょうね。

それで今後の問題としては、こうした飯田さん固有のパーソナリティがなくなり出し、それを中心に動いてきた大学セミナー・ハウスの理念を、時の流れと変化のなかでどう継承し、具体的な活動としてどう発展させられるかということがありますね。宇野さん、どうお考えですか。

セミナー・ハウスの今後

宇野 この十五年間につくられてきた基本的な流れはこのまま生かしてほしいですね。ともかくこの丘に来て、とても気がいいわけですね。あなたかく迎えられる。他の業者などには求めえない、あの雰囲気はつづけてほしい。と同時に、時代の変化とともに、キメ細かく考えねばならない問題もいっぱい出てきていますね。

岡 たえばどういいう……。

宇野 設備の問題ひとつ取り上げても……。

岡 そうそう、吉阪さんにもちょっとかがいたいのですけれども、ユニット・ハウスのあの洗面所、とくに冬場、吹きさらしのトイレに行き洗面するのは、簡素にしているのも、簡素をこえたものがあるのではないかと……。

吉阪 私もその話はよくききましたけれども、今の学生はなまっちゃんという感じですね。

岡 なまっちゃんよろい？(笑)

吉阪 自然のきびしさをもっと知ってほしい。

岡 そんな意図があった……。吉阪 その上で人工のよさを知らる。

飯田 デインプリンという要素はあるんですよ。ただ、どの程度のところまで平均的感覚と合わせるかという判断が必要ですよ。

宇野 そううかがいますと、その理念は生かしておいたほうがいいと考え直してはじめていいところですが……(笑)。それにしてもあそこは指導する場と同時に、学生との交流の場である。とすると、時代とともに学生の感覚も変わってくるものとするならば、また事前の教育訓練もできないとするならば、きびしくあつていい面と現実的に工夫していない問題とがあつて、キメ細かい対応が必要になりますね。少し話はずれますが、酒を飲むことについては、もつときびしくできませんか。私は、日本人は酒を飲まないかと心割って話合えないなんて情ないと思つて、夜を徹して話合ふなんて聞かす。夜を徹して話合ふなんて聞かす。夜を徹して話合ふなんて聞かす。夜を徹して話合ふなんて聞かす。

私にはあそこは静かな雰囲気のものなでじっくりと思想とか理論とかを議論する場として、また場合によっては教師同士で意見を交換する場としてあつてほしいと思うのに、今はもう一時間もすると、ワンワンワン、どこかの業者のコンパ会場と同じですね。あんなところで合唱する必要など全然ない。

吉阪 飲む場所としては大学院セミナー館に限定したはずだが。

飯田 当初はそう考えたが、時代とともに順応したわけです。外国

人のお客もあるし、酒を飲む場も必要です。ただし、今おっしゃったとおり、わめく場所ではないはずはないので、その際、酒の飲み方、コーヒの飲み方、他人に迷惑をかけない話の仕方等々の教育、生活のしつけが必要になる。

今の大学にない、そうした面の指導を受けもつことも大学セミナー・ハウスの一つの重要な役割になっていますね。ハウスにはまさにハウス・マナーが必要であり、それをみちびくハウス・マザーというか、マネージャーが必要だと、私がかねがね思つていました。

岡 学生の利用の仕方、その指導の仕方にも時代による変化があり、問題がありますね。

宇野 私はここは、個性、独創性のある人間のふれ合いの場であると思ひます。ですから、他人に迷惑をおよぼすなんて最低ですね。それは時代が変わっても変わらない。何がきびしくあるべきかを形式的に言うわけにはいかないけれども、そういうものを考え、一緒につくっていく場ではあつてほしいと思ひます。

大宇と社会、大宇と世界

永井 今までの大学セミナー・ハウスの推移を見ると、変わってきているところもある。始めのころはインター・ユニバーシティでした。その後、二つぐらいの要素が加わってきています。一つは会社に入った人たちが来るようになった。もう一つは外国人が来るようになった。それから最初の会合が日本のなかでの他の大学の会合だとすると、後に出てきたのは大学と社会、さらには国を越え

る会合ですね。現状はともかく、将来のこととして考えておもしろいのは、大学と社会、大学と世界のもつと広い場でのさまざまな交流ですね。さつき話題になった学生の行動のなかにある学生文化そのもののあり方、その創造性や国際性の育成の仕方など、観念論としてでなく、具体的に考える時期にきているように思ひますね。

岡 社会人と大学生とのふれ合いですが、前に大学セミナー・ハウスの卒業生の会に招かれたことがあるんです。その時の学生と社会人との懇談の内容がたいへん面白くて印象に残つていてるんですよ。

永井 情報社会、知識社会といわれる現在、セミナー・ハウスの構想がはじめられた二〇年前とはいろい違った状況ができつつあるので、知識人といっても、単に大学など一部の限られた世界だけでなく、いろんなところに今は分散しています。ですから、学生だけでなく教える側の人にとつても、そうした社会と大学の間の交流、ディスカッションが望まれる領域が非常にひろがった。第一に、これをやることによって大学が元気になる。それを私はこれからのセミナー・ハウスの一つの新しい方向として期待したいですね。

飯田 将来に向かっているいろいろなアイデアを先生方からいただくこと、たいへんありがたいのですが、それだけにそれを受けて立つ職員、スタッフの充実が望まれます。それと人材の養成というセミナー・ハウス本来の役割について、高齢化社会という福祉社会と婦人の活動する新しい時代が来て

いるという現時点において、そうした人たちの能力の活用ということをよくよく考えてみる必要を感じますね。

岡 共同セミナーの百回記念の時期にある新聞に「大学の裏方さん」と題してセミナー・ハウスのことを書いた時に、こんな言葉で裏方さんを表現したんです。「カゴに乗る人、かつぐ人、そのまたワラジをつくる人」ですね。大学セミナー・ハウスの高邁な理想のもとに集まってくる学生たちはこのもう一つの大学でのいわばカゴに乗る人なんですよ。そこでかつぐ人であるセミナー・ハウスの活動は大学の裏方さんというわけ。でもさらにそのワラジをつくる人があるんですよ。ポイラーの世話をしてくださる方とか、シートをかかえて丘をのぼりおりする方たちですよ。そのワラジをつくる人たちに、やっぱり楽しく気持ちよく働いていただきたいと思ひます。そういうような雰囲気、ここにいるだけで、なんとなく暖かい気が通いあうという、ふれ合いの心が全体にみちみちしてはじめて、セミナー・ハウスはみんなに愛され、見守られ、支持されるものになるのだと思ひます。

十五年経って時勢が変わり、集う人の要求も変化してくるところはあつても、この変わらぬ「心」は、いつまでも、すみずみまで浸透してほしいと思ひますし、私ども、この大学セミナー・ハウスにかかわりを持つものは皆で協力し努力する必要があるのではないかと思ひます。

では、どうも長時間ありがとうございました。

では、どうも長時間ありがとうございました。

### ● 事業部だより

55年4・5・6・7月

#### 春から夏の利用状況

#### ● 四カ月の利用概況

新年度4月から7月までの四カ月の利用グループは別掲「利用状況」で紹介されているとおりである(それぞれの月の利用グループ数、宿泊延人数の集計は、本号より同欄各月の冒頭に記載することにしたのでご参照いただきたい)。因みに、この春から夏にかけての四カ月の合計は、グループ数三六四(昨年度三四四)、延二〇〇九二人(同一七、二四四人)、月平均にして九一グループ、延五〇〇二人である。これを一日平均に換算すると一六七人、定員比六二%の利用となる。若葉から青葉への季節は例年にも増して活気に溢れた。

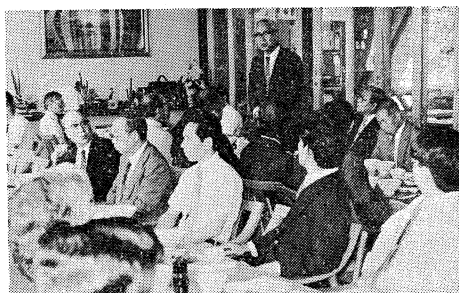
#### ● 新入生オリエンテーション総括

さて、「利用状況」表に「新入生オリエンテーション」「新入生研修」「フレッシュマン・キャンプ」など、新入生のための合宿の多いことにご注目いただきたい。ゼミの指導教授や上級生によるクラス単位の小規模なものから、学科単位の中規模なもの、そして学部単位、あるいは新入生全員が参加する大規模な合宿に至るまで、その形態・内容は多様である。この四カ月のこれら新入生対象の合宿の利用を数字で表わすと次のとおりである。

まず件数にして計五四(4月24、5月21、6月6、7月3)、うち全学的規模のもの六、学部単位一〇、学科単位三二、クラス等単位六。また、利用者別では会員校三五、非会員校一三、その他各種学校等六となる。利用者数では学生五、三三五人、教師六二人、計五、九七六人、これを宿泊延人数に換算すると計七、三四三人におよび、この期間の総延人数の三六%(4・5両月については五一%)を占めることになる。因みにこれらの数字を過年度と対比してみると、昭和42年度同期に当ハウスで開催された新入生合宿は二件、延二、四四五人(同期総延人数の一八%)。次に一〇年後の52年度には三〇件、延四、六〇六人(二七%)であるから、年々増加の一途をたどってきたことが明らかになる。そこに、新入生を迎え入れる大学側の真剣な対応の姿勢を、また、その施策の一つとして企画される「宿泊を伴うオリエンテーション」の意義が近年ますます教職員・学生双方から評価されている事実を見てとることができ、それはまた、当ハウスの役割を再認識させる数字でもある。これら大学側の努力に可能な限り協力するとともに、入館時のガイダンス等で当ハウスの存在理由を知らしめ、新入生が大学生活の中で当ハウスの意味のあるつながりを深められるよう求めている。

#### ● 連続開催14回の「新入生セミナー」(「わたしたちの合宿」紹介その1)

さて、本号の「私たちの合宿」(別掲)には、以上の新入生合宿から二つのグループに登場願っ



八王子市大学連絡協議会の昼食会であいさつする茅理事長

文をお寄せ下さった文教育学部哲学科・尾田幸雄教授(学生部長兼任)は、第一回以来一四年間この新入生セミナーを見守ってこられた方。この度も三日間を通してこの新入生合宿の「ホスト」を務められた。

#### ● 新しい企画「留学生オリエンテーション」(「わたしたちの合宿」紹介その2)

もう一つの紹介は、慶応義塾大学国際センター主催の「外国人留学生オリエンテーション・キャンプ」で、このほうはユニークな新企画の合宿を代表していただいた。昨年に引き続き二回目で、今年も4月中旬の週末に一泊で実施された。オーストラリア、シンガポールの六カ国・二〇名の留学生在が二八名の日本人学生、二二名の教職員と、今回は国際セミナー館を中心とし、同館が目指す「共同の生活体験を通して人間の交わりを深める小規模な合宿」にふさわしいプログラムを展開した。外国人留学生の円滑な受入れのために各大学が実施することのような計画に、今後一層当ハウスが利用されることを願って止まない。なお、同キャンプを主催した国際センターは、慶応大学の海外との交流の窓口として外国の大学や研究機関との学術文化の交流、教員や研究員、学生との交換、招聘、派遣および各種資料・情報の交換などを行ない、また留学生関係諸行事の企画・実施にもあたっている。昭和39年、それまでの外事部が発展的に解消、同センターが発足して以来、一六年の歴史を持つ。今回のキャンプには五名の同センター職員が参加

た。その一つはお茶の水女子大学の「新入生セミナー」で、当ハウスでの開催が昭和42年以来連続一四回目という伝統ある新入生大型合宿。毎年夏休みに入ってしまう7月中旬に行われるので、当ハウスの「フレッシュマンの季節」を締めくくる恒例行事となってきた。今年も二回に分かれて実施され、7月18・19日には理・家政学部の八学科一九九名(うち教職員二〇名)、同19・20日には文教育学部一〇学科一八九名(うち教職員二四名)、合計三八八名が参加している。このセミナーの特徴は「学科別行動」と呼ばれる教員と学生の自主的なプログラムに重点がおかれることで、今回も各セミナー室での懇談に加え、前もって調査しておいた八王子の町の実地観察(地理学科)、多摩動物公園への遠足、文化祭の打合わせ、キャンプファイアードなど、さまざまな小グループごとの、または合同の企画が組まれていた。別掲の一



ロータリー「青年リーダーセミナー」植樹風景

されたが、そのお一人清水尚主任に同キャンプの模様を紹介していただくことができた。

● その他のトピックスを拾う

新入生とそれにふさわしい青葉若葉のこの時期のその他のトピックスを選んでご紹介しよう。新年には新しく編成したゼミナールの顔合わせも少なくない。今春見られた新企画には成蹊大が試みた「新三年生合同オリエンテーション」がある。文学部一〇ゼミグループ八五名の合同合宿で、4月下旬に開催、「大いに成果を上げた」(山口欣次教授)。恒例の九大学合同セミナー(一四五名)は、「80年代の日本の国際的役割を求めて」をテーマに、6月下旬に二泊三日で開催された。昭和48年から三年間当ハウス主催の共同セミナーとして行われ、その後各参加大学の実行委員会を中心とする自主的な運営に移されたこのセミナーは、今年で通算八回目。当時の七大学が現在は慶応成蹊津田塾、聖心女

子、一橋、上智、ICU、明治、神奈川の九大学へと発展した。今回も宇野重昭(成蹊)、三輪公忠(上智)、池井俊(慶応)など当ハウスと縁の深い方々が指導教授として参加されている。これも恒例のICU教育心理学研究室の「心理学サマー・セミナー」は7

**14回目を迎えた  
夏の新生セミナー**

尾田 幸雄  
お茶の水女子大学教授

お茶の水女子大学が夏の新生セミナーを始めたのは昭和42年のことである。当時の藤田健治学長は、かねてから学長と学生とが日頃接する機会の少いことを歎いて、みずから新生全員を教回に分けてお茶の会に招いては懇談につとめてきたが、折よく大学セミナー・ハウスが開設されたので、早速会員校としてこれを利用して、ことになったのである。したがって、第一回は「学長・補導教官と新生との宿泊懇談会」という名称で、7月1日から4日にかけて新生一六〇名が三班に分かれ、



本館前にバスで到着の新生たち

月中旬に、また、「多摩丘陵の動植物の形態と生態観察」でこの季節の常連となった京浜女子大「夏季自然講習会」(一五五名)は同月下旬に、それぞれ三泊四日の合宿を行った。芝浦工大建築学科の「八王子合宿」(七八名)も、すっかりこの丘の定例行事となった。

学長はじめ教官・職員四名が参加して、それぞれ一泊二日の日程でおこなわれた。

当初はその趣旨がまだよく理解されていなかったこともあって、学生自治会が反対の立看板を立てたり、クラスによっては不参加を決議したりしたところもあった。

しかし、実際に参加した学生は、大学の永年の夢を実現したともいべき大学セミナー・ハウスで、教官と学生、あるいは学生同士の話し合いに夜のふけるのも忘れたのである。

それ以後、各クラス別の教官と学生との懇談会が行事の中心となり、なんらの強制もともなわれない全くの任意参加であるにもかかわらず、参加希望者はふえ続け、現在ではほぼ大部分の一年生が進んでこれに参加するようになった。

もっとも今回は例年とちがって、正規の授業終了後一週間たったの催しであったため、参加者総数三三五名と在籍者の八二%にとどまったが、セミナー終了後のアンケートをみると、八六・五%の者がセミナーに参加してよかったと答え、八五・八%が場所をも含めて施設に満足し、半数以上の者が一泊二日では期間が短かすぎるとし、また「セミナー・ハウスの人達がとても親切で協力的だっ

国際ロータリー第28地区主催の「第4回青年リーダー・セミナー」は今年も5月初旬の三連休に「全館貸切り」で開催され、ロータリー関係者四五名、全国各地からの青年二〇五名計二五〇名が参加、好天気に恵まれて無事終了した。安岡章太郎、扇谷正造両氏も講演た」と特記する者もいるなど、一四年間続いて実に延四千人もの学生が参加したこの行事の、お茶の水女子大学の学生生活における定着ぶりをうかがわせるに充分である。

**第2回外国人留学生オリエンテーション・キャンプ**  
清水 尚  
慶応義塾大学国際センター主任

新緑の美しい4月19日(土)、20日(日)の週末を利用して今年慶応大学に入学した外国人留学生を対象とするオリエンテーション・キャンプが開かれた。このキャンプは昨年同時期に第一回が開かれ、今年が二回目である。

慶応大学の各学部には毎年それぞれ数人の外国人留学生が入学する。彼等は直ちに様々な問題に直面するが、これを克服して新しい環境に適応してゆくのは容易なことではない。

この彼等の出発を少しでも円滑なものにしよというのがこのキャンプを始めた動機である。従って、参加者は新入留生が中心であることは言うまでもないが、これに各学部の学習指導の任に当る諸先生方、二年生以上の先輩留生、さらに留学生の学園生活を支援するためのグループとして従来

され、若者たちは大きな啓発を受けた。最終日七時からの「朝のつどい」の後、立派な山桃の木の植えられた「ようこそ広場」に全員が集合、記念植樹式(別掲写真)が行われた。同セミナーで奉仕された東京三鷹ロータリークラブ会員で歌人の渡辺為好氏は、その朝の模範から存在する通称KOSM I Cの日本人学生達も参加して行われた。参加は任意ではあったが、留学生も日本人学生もそれぞれ二〇名を上廻り、これに教職員一三名が加わったので全体で約六〇名の多数となった。

宿泊は昨年と同様に国際セミナー館を中心とし、夜は主として中央セミナー館、夜の懇親会は交友館において行われた。

会合は参加者全員によって行われるものと、各学部別に分かれてのものとから成っていた。何分にも一泊二日という限られた日程であるので、どうしても一種の物足りなさが残るのは否めない。それでも入学早々で西も東も分からないという状況の中の留学生達にとっては、いわば一挙に多くの他の留学生や日本人学生、それに今後の指導に当る諸先生方とも知り合うことが出来て、今後の大学生活にとって大きなプラスであろうと思われる。

内容や日程について参加者からいろいろ希望や要望があるが、新年度初めの忙しい時に開くことなるので思うようにならない点多々ある。今後さらに検討を加えてより充実したものになることを願っている。

様を「若者の集いし中に山桃の、植樹おわりて朝はすがしも」と綴って下さった。

7月1日から四泊で文部省学生課主催の厚生補導研究協議会が開催され、全国各地の国立大の厚生補導関係職員八〇名が参加された。これは、これらの参加者として文部省担当者に当ハウスを「体験的に」知っていただく、またとない機会となった。また、八王子地区に移転した各大学の共通の問題を話し合い、共同の活動を推進していこうという八王子市大学連絡協議会の定期会合が7月23日当

ハウスで開かれ、同協議会会長の後藤聡一八王子市長はじめ一三大学の学長など関係者計四名が参集された。交友館での昼食会には茅理事長も出席、あいさつされた(別掲写真)。これまた当ハウス紹介の願ってもない機会であった。

**●キャンプ点描**  
4月12日 東邦・東海両大学の医学部がともに二泊の新生オリエンテーションで来館。特別講演の講師として前者は永井道雄氏を、後者はなだいなだ氏を招聘。夜の交友館では両医学部の新生と教官が、大学を越えて交歓した。

4月14日 東海大学医学部新生研修会の教師・学生計一三二名が持参のけやきの苗木三株を大浜岬附近に記念植樹。

4月18日 夕食時に三グループ一六〇名が交歓。吉阪正隆早大教授が当ハウスの建築についてスピーチされ、明学大・秋山ゼミが同校の応援歌を披露。  
4月20日 東京農工大農業工学(次ページ4段へつづく)



◆千人会

昭和55年4〜7月

◇現在会員は、六二三名です

大学人Ⅱ 一、二二一名  
社会人Ⅱ 四〇二名

◇新しく会員となられた方々

13名〔第54回報告(申込順)〕  
聖心女子大学教授 進藤 トク殿  
大妻女子大学学生部長 緒方 眞也殿

東京農工大学助教 鬼塚宏太郎殿

跡見学園女子大学教授 橋本 研一殿

元新瀉大学教授 佐藤 百世殿

青山学院大学教授 岡岡 昭夫殿

白鷗女子短期大学 舛刈 照範殿

東海大学教授 横田 英嗣殿

東京学芸大学助教 宮腰 賢殿

成蹊大学大学院博士課程 別枝 行夫殿

東京芸術大学講師 島田外志夫殿

慶応大学教授 山田 辰雄殿

東京医科歯科大学医学部附属病院 橋本 トク殿

医事課 橋本 トク殿

◇会費ありがとうございます

55年4月〜7月(敬称略)

浦野伊和子、浮田久子、進藤トク、佐藤和男、石渡毅、井出翁、古屋健三、土橋信男、村上千賀子、小泉文夫、加藤寛、守屋美賀雄、小倉芳彦、大畑篤四郎、石井千尋、田所光子、小原孝一郎、藤井弥太郎、原一雄、山崎俊雄、山元洋、館逸雄、天野正治、大槻盛一、林邦夫、萩原裕、中島直忠、石弘光、村山松雄、山崎邦彦、柴田泰比古、斎藤幸一郎、瀬川美彰、留、渡利千波、村田勝彦、東洋、富沢賢治、古崎愛子、海老根宏、吉沢四

郎、護雅夫、染谷恭次郎、井上繁、小川仁、越智昇、堀野定雄、村田喜代治、関根隆光、豊田昌倫、豊嶋広司、池原義郎、高峯一愚、久保田浩、高松正昭、萩原玉味、都留春夫、江洲浩美、倉沢進、鈴木基之、平木典子、矢野洋四朗、塩田庄兵衛、安藤賢一、小島蓉子、谷口茂、堤彰、木村尚三郎、原口隆英、水谷三三、高木健太郎、岡岡昭夫、前田愛、羽田三郎、小泉一郎、奥野忠一、池田和夫、矢野正、伊倉退蔵、下森定、横山勝信、土居健郎、二宮永蔵、谷口雅男、山崎誠、佐伯彰一、上村学、岡安茂祐、吉利喜美、竹内昭夫、清永昭次、鈴木友二、神保信一、桐生富久、下出積興、橋口英俊、小原清成、西勝、森田桐郎、福田一郎、田中恵美子、北野弘久、菅野晔、佐藤経明、大河内正陽、林武、工藤康雄、鈴木達雄、野々口格三、舛刈照範、芳賀徹、阿久津喜弘、後藤捨男、羽田新、向山文雄、大塚久雄、木島康彦、矢澤大二、古西信夫、中村英雄、栗木弘、前島郁雄、富山芳正、川口赤弘、木間寛、近藤裕、青木清明、藤澤清、赤根也、桜井育子、野間三郎、芳山邦弘、平野文彦、鈴木悌二、梅沢文輔、大原栄一、緒田原涓一、加藤一郎、橋本次郎、鳥居照男、手塚一朗、狩野紀昭、細谷千博、山澤逸平、荒井献、中岡保、金子六郎、本吉修二、安藤利亮、山之内靖、若崎英二、関口富佐、山之内靖、若崎英二、滋賀秀三、山原太郎、井早康正、渡辺秀三、山下肇、久保田静枝、野見山一、北村甫、宗像元一、西宮輝明、末武国弘、枋原敏房、角田稔、堤辰次郎、芹沢栄、今井栄、中村孝俊、石川孝夫、

吉田裕、天城勲、木村健二郎、加藤秀俊、峰岸純夫、早坂泰次郎、福田雄、上田明子、佐藤百世、佐藤滋、深海博明、高柳暁、鈴木二郎、犬塚博、阪本泉、奥山典生、椿弘次、関口忠、玉真秀雄、大村晴雄、近藤正夫、仁科雄一郎、平川紀一、中川作一、栗田見瑞、竹村榮、内田市五郎、松井源吾、安斉伸、柴垣和三郎、中嶋嶺高、徳永勇雄、荒井基、大野佐喜子、高橋忠治郎、朝野洋一、今井義夫、澤島信子、千野熊男、榊原祐輔、熊田陽一郎、鈴木慎一、市川博信、板倉讓治、松井共子、佐野雄二、平山美枝子、和田英一、道喜美代、三宅義夫、黒田成俊、原治、藤井耕一、菅沼憲治、竹内喜夫、徳末愛子、大籠まり子、石井修二、荒川有史、三浦徳弘、江沢洋、柳田博明、早川和男、合田周平、小島守生、柴田勇造、宮腰賢、古畑和孝、柴田恭二、望月継治、篠原泰三、鶴見和子、見田宗介、小倉充夫、有賀弘、吉田幸弘、中村幸安、上田初子、石川達雄、長谷川幸男、北野義明、岩橋信隆、武者利光、治、西川義男、若橋寛隆、西川大内力、金子晃、石川信男、名東孝二、柳下勇、坂野正高、岡田正弘、川名明、太田秀通、川島順平、井上宇市、猪瀬尚志、栗林恒雄、阿部齊、大野泰雄、白井久和、青木郁朗、笹森健、秀村欣二、吉松澤子、百瀬安、田中未来、別枝行夫、長澤孝廣、伏見康治、中野ミチ子、今堀和友、林泰造、朱牟田夏雄、中山昌、辻達也、関順也、鈴木務、上代タノ、市井三郎、長清子、西嶋定生、竹内喜代司、嶺哲之助、川添奈津子、川田雄一、柴

(前ページよりつづく)  
科(三八名)が日帰りて新入生オリエンテーションを実施、夕食をもに解散。  
4月27日 遠来在茶道教室開催。前日から一泊で開催の日本体育学会体育史専門分科会の外国人講師を含む計四〇名が参加。  
5月4日 小池生夫慶大教授がご家族同伴で記念植樹に来館、第一群中庭にやまぼうし・月桂樹など計七株を植えられた。  
5月14日 新入生歓迎セミナーで合宿の都立立川短大の学長はじめ教職員・学生計一〇六名が第三群斜面に植えたこぶしの木を囲んで歓入れの植樹祭を行った。  
5月21日 東経大創立80周年記念映画に当ハウスでの「学外研修合宿」が収録されることになり、映画チームが国際セミナー館内での同大富塚ゼミの研修風景を撮影。

6月22日 遠来在茶道教室に聖心女大・星野ゼミ、電通大・水野ゼミ、新入生オリエンテーションで合宿中の白梅短大保育科の学生など計五二名が参加。  
7月5日 七七夕に近い週末、夕食時に在泊九グループ(二三五名)を紹介。交友館前の笹竹に飾られた七七夕の短冊から在泊者の「願いごと」を拾ってみると、「無事修士論文が仕上りますように」「80年代の日本はどうあるべきかを考えよう」「日本の大学間の互いの壁が真にどう払われるようになるまで、セミナーハウスの事業が質的発展をすることを願います」など。

5月31日 夕食時の食堂で第109回共同セミナーを含む七グループ(二七大学)二二名が交歓。共同セミナーの深海博明慶大教授のスピーチの後、東京理科大有志の出しもの、全員の合唱など。なお、関東聴覚障害者学生懇談会の参加者一〇名(七大学)中唯一一人の健聴者・永尾清香さん(大東文化大)が終始手話で「通訳」しておられたのが印象的。

7月7日 埋立てが決った法大小金井キャンパス(工学部)の池の魚が当ハウスに贈られることになり、学友会技術連盟(当ハウスの利用一三年目)の学生、生魚氏の手で鯉六〇尾、鮒三〇尾、金魚三〇尾が国際セミナー館前の池に移された。  
7月21日 大学英語教育学会(VACU)主催の第14回夏季セミナーが今年も国際セミナー館を会場に開始された。参加者は外国人講師を含め計四二名。開会式は、例年のように小川芳男、高橋源次両氏が元氣なお姿を見せて下さった。  
恵、藤原鎮男、福田敏一、岡沢憲美、坂田道太、柏木恵子、慶谷伸代、中川一朗、高橋公雄、藤平重雄、宅間宏、山西貞、尾崎茂、佐藤慶幸、内田祥哉、外山敏子、松原治郎、朝日信夫、山田辰雄、山本幹夫、小西悟、橋本研一、吉田美穂子、中村浩三、三

和治、築田長世、川合隆男、太田善  
磨、角瀬保雄、永井裕米村貞藏、品  
川孝次、平出彦仁、犬井鉄郎、栗原  
尚子、奥田夏子、土田美芳、小池滋、  
関野昭一、三宅彰、沢崎守孝

◇会費に添えられた言葉を拾う

3月28日よりソ連・東欧の旅に  
出かけます。マイケル・ハドソン  
の『新国際経済秩序』を訳し、  
4月に出版の予定です。

青山学院大学教授 佐藤和男

今年も元気で春を迎えました。  
学生の頃から御世話になって、早  
や若い学生達に学んだ事を還元す  
る年となりました。感謝します。

神奈川大学助教授 堀野定雄

本年4月から大学入試センター  
研究部に移り、大学入試制度とい  
う怪物と取り組むことになりました。  
大学入試センター 中島直忠

一五年ほど前、日本女子大から  
派遣されて手塚富雄先生をチェア  
マンとする箱根会議に出たのを思  
い出します。期待はしていましたが  
本日の盛運までは予想しきれま  
せんでした。

東京大学教授 東 洋

中国旅行に出ておりましたので  
御送金おくれ失礼しました。

東京大学教授 護 雅夫

つねに流動的な現代社会の中に  
あってセミナー・ハウスも模索と  
試練の中に成長を続け、よき指標  
としての価値を増し加えて下さ  
い。 学習院大学教授 小泉一郎

たまたま、小生の誕生日の周辺  
で、新入生オリエンテーションが  
開催できる事を欣んでいる次第で  
す。

工学院大学専任講師 池田和夫

はるげくも来つるものかな喜寿  
の春。貴館の御発展を祈り上げま  
す。

元国立大学協会主事 二宮永蔵

イギリスの子供達へ日本の教育  
を考えるという本を書きあげま  
した。

明治学院大学教授 神保信一

心暖まるパースデーカードを頂  
きましてありがとうございます。  
「セミナー・ハウス」毎号多  
謝、とくに65号で、今年が意義深  
い年であることを知りました。セ  
ミナー・ハウスのいつその発展  
をお祈りいたします。

学習院大学教授 清永昭次

セミナー・ハウスは学ぶことを  
目覚めさせる場です。これからも  
私の生活の大切な場として活用さ  
せていただきます。

早稲田大学教授 西宮輝明

誕生日のカードをありがとうございます  
ございました。今夏も新入生と一緒  
に八王子の山を訪ねることになり  
ましょう。どうぞよろしくお願  
い申し上げます。

お茶の水女子大助教授 澤島侑子

5月18日から10日間集中講義で  
単独訪ねいたします。

横浜国立大学教授 佐藤経明

おかげさまで、本日無事六九歳  
の誕生日を迎えました。千人会の  
会員を続け得たことを、光栄に、  
また幸せに思っております。

明治大学講師 藤井耕一

あと一〇日です。喜寿を迎えます  
が、元気に消光していきまして、仏  
文芸書を耽読する毎日です。

元早稲田大学教授 川島順平

小生も本日で満八十歳になりま  
した。いやはや。セミナー・ハウ  
スの隆盛を祈ります。

学士院会員 岡田正弘

去る4月、多年の友人前田護郎  
君が急逝し、痛惜の念が未だ去り  
ません。館長先生の御自愛を祈り  
上げます。

青山学院大学教授 秀村欣二

誕生日カードを頂き、このような  
ささやかなことが、何かの役に  
立てばと思うと生きていることの喜び  
に自ら心温まる思いです。千人会  
との「めぐりあい」を心から感謝  
して居ります。幸い本学も本年度  
から会員校として仲間入りしまし  
たので、又新しい企画を考え八王  
子の丘でお逢いしたいと念じてい  
ます。

千葉大学学生課長 嶺哲之助

ほととぎすのしのびねを聴きな  
がら健康で六十六歳の誕生日を迎  
えたことを感謝しつつ三千人会費  
をお送りします。

洋画家 三橋文雄

●寄付金報告

55年7月末現在

ご支援を感謝して拝受いたしま  
した。

△視聴覚施設・設備充実募金▽

2,000円 青山学院大学

10,000円 原豊ゼミナール殿

慶応義塾大学 西川研究会殿

3,000円 九大学合同ゼミナール

実行委員長 小吹武次殿

50,000円 芝浦工業大学建築学科一同殿

20,000円 第110回大学共同

ゼミナール指導教授一同殿

一六、三三円 第110回大学共同

ゼミナール参加学生一同殿

一、八〇〇円 日本化学株式会社

品質管理社内研修ゼミナール

武蔵時宗殿

一四、〇〇〇円 京浜女子大学

夏季自然講習会学生有志殿

三、〇〇〇円 日本基督教団国立教会

聖歌隊幹事 中島省吾殿

△現物寄付▽

けやき苗木(三本)

東海大学医学部新入生研修会殿

一位(一本) 青葉学園短期大学

助教授 吉田美穂子殿

やまぼうし・月桂樹・庭梅・すず

らん(各数株)

国士館大学教授 小池義公殿

慶応義塾大学教授 小池生夫殿

やまもも

国際ロータリー第258地区第4

回青年リーダー・セミナー殿

鯉60尾・鮒30尾・金魚30尾

法政大学(技術連盟)

工学部長 山内明雄殿

●寄贈図書

55年1~3月

「会報」40 「内外大学関係情報資  
料」6 大学基準協会殿

「中国現代史の課題」 勁草書房殿

「心とこころのふれあうとき」 「教  
育心理学序説」 国分康孝殿

「新・文化立国論」 金山宣夫殿

「一本のあきびんから」

「さびの科学」 「生活の中の洗剤活  
性剤」 山村徳太郎殿

「台湾と台湾人」 井上勝也殿

「ツアラトウストラの深層」 戴 國輝殿

「ルソー全集」第一巻 小林善彦殿

「ヨーロッパ経済・社会・文化」 増田四郎殿

「世界経済の歴史・理論・展望」

「わが青春のサッカー」堀江忠男殿

「世界経済 基軸と周辺」 馬場宏二殿

「ディベート道場白書」松本道弘殿

「認知と言語の神経心理学」 「都市  
環境と住まいの心理学」

「同志社時報」 67 原 一雄殿

「紀要」 11 同志社大学殿

「日本大学精神文化研究所殿

「日本美の再発見」 「今昔 飛騨か  
ら裏日本へ」 河田敬義殿

「アジアの友」 10・12

「紀要」 13 アジア学生文化協会殿

「国際交流」 22 東海大学短期大学殿

「採集と飼育」 2・3 国際交流基金殿

「金融経済」 180、「わが国金融市場  
の形成」 日本科学協会殿

金融経済研究所殿

「会報」87 国立大学協会  
 「人と日本」4、「社会学論叢」77、  
 「学叢」27 笠原正成殿  
 「国際協力」2、3月 国際協力事業団  
 「立教」92 立教大学広報課  
 「大学研究ノート」39、43 広島大学教育研究センター  
 「工学院大学研究報告」46、「研究  
 論叢」16、17 工学院大学  
 「欽定訳聖書の文学的系譜」

「不幸の樹」 斎藤國治殿  
 「民衆文化の源流」 池田 修殿  
 「精神と言葉」 出口純夫殿  
 「現代詩研究」296 現代詩研究所  
 「世界経済論を学ぶ」 森田桐郎殿  
 「開設10周年記念特別セミナー」講  
 演集「広島YMCAのち学荘殿  
 [SSI Journal] 33

早稲田大学システム科学研究所  
 4月  
 (102グループ、延五、七九七人)

●利用状況

● 11月2日利用  
 ● 11月3日利用

日本女子大学教授 徳末 愛子  
 明治学院大学教授 久世 了  
 青山学院大学教授 原 豊  
 中央大学美術倶楽部  
 津田塾大学ESS 高本 進  
 学習院大学教授 西川 俊作  
 慶応義塾大学教授 君島 和彦  
 東京学芸大学講師 坂井 正廣  
 青山学院大学教授 川合 隆男  
 慶応義塾大学教授 鈴木 守  
 東海大学教授 尾形 憲  
 法政大学教授 日高 普  
 法政大学教授 正平  
 相模女子大学助教 巻 正平

早稲田大学助教 横田 信武  
 青山学院大学教授 深沢 実  
 早稲田大学助教 鹿野 政直  
 明治学院教授 設楽 正雄  
 東京薬科大学合唱団 国際基督教大学教育哲学研究会  
 日本大学教授 小田切松義  
 日本大学教授 石山 伍夫  
 島野 卓爾  
 早稲田大学新入生歓迎会 市川 孝正  
 早稲田大学講師 高田紀代志  
 東京理科大講師 駒沢大学講師 金子 昇平  
 駒沢大学助教 谷敷 正光  
 東京女子大講師 鈴木 守  
 明治学院教授 寺田 由永  
 東海大学医療技術短期大学新入生  
 オリエンテーション 星谷 勝  
 武蔵工業大学教授 星谷 勝  
 東京医科歯科大学新入生校外オリ  
 エンテーション 平井 俊顕  
 駒沢大学講師 小関 勇  
 日本大学講師 西川 潤  
 早稲田大学教授 川口 弘  
 中央大学助教 木島 淑孝  
 中央大学助教 五井 一雄  
 法政大学助教 岡本 義行  
 成蹊大学教授 宇野 重昭  
 東海大学医学部新入生研修会 東海大学教養学部文科Ⅲ類新入生  
 歓迎会 石井 啓雄  
 駒沢大学教授 堀野 定雄  
 神奈川大学助教 広瀬 鎌二  
 武蔵工業大学教授 秋山 智久  
 明治学院大学助教 吉阪 隆正  
 早稲田大学教授 奥野 隆生  
 慶応義塾国際センター(留学生  
 オリエンテーション・キャンパ  
 日本女子大学社会福祉学科新入生  
 オリエンテーション 松田 馨余  
 東京都立大学助教

東京農工大学農工学科新入生オ  
 リエンテーション 十川 信介  
 学習院大学教授 坂元 忠芳  
 東京都立大学助教 武蔵工業大学土木工学科新入生  
 歓迎会 大久保治男  
 駒沢大学教授 新入生歓迎会  
 東京大学教養学部文科Ⅰ類(7組)  
 新入生歓迎会 松崎 義  
 工学院大学工業化学科新入生オリ  
 エンテーション 佐竹 義昌  
 法政大学助教 広野 良吉  
 学習院大学教授 奥平 康弘  
 成蹊大学文化学科新三年生合同オ  
 リエンテーション 福田 一郎  
 東京女子大学教授 長谷川浩一  
 青山学院大学助教 森田 桐郎  
 一橋大学基督教青年会 青山学院大学キリスト教フェロー  
 シップ 広田 明  
 法政大学助教 中山 弘正  
 明治学院大学教授 武蔵工業大学  
 学芸部助教 横山 定雄  
 日本大学物性研究所 北野 弘久  
 明治学院短大教授 岡山 礼子  
 国際商科大学助教 米山昭一朗  
 横浜国立大学教授 柳下 勇  
 東邦大学医学部新入生オリエンテ  
 ーション USA・T・H・O・オリエンテーシ  
 ョン科短大機械工学科・精  
 密機械工学科新入生オリエンテ  
 ーション  
 東放学園専門学校新入生研修会\*  
 都立商科短期大学経営学科新入生  
 オリエンテーション

5月 (88グループ、延五、三六五人)  
 専修大学教授 萩原 稔  
 東京経済大学助教 福広 健  
 東海大学教授 横田 英嗣  
 東京学芸大学経済学研究所 松本 恒之  
 学習院大シニエイクスピア劇研究会 三戸 公  
 立教大学教授 野村 隆夫  
 千葉商科大学教授 金子 六郎  
 東京農工大学教授 野村 隆夫  
 電気通信大学助教 牛島 照夫  
 東京学芸大学(理科教育)新入生  
 合宿研修 横田 洋三  
 東京学芸大(化学)新入生合宿研修  
 国際基督教大学教授 兵頭 次郎  
 学習院大学教授 高野 暉  
 東京大学教授 寺内礼次郎  
 中央大学教授 波多江健郎  
 工学院大学教授 成田誠之助  
 東京学芸大学(幼稚園教員養成課  
 程)新入生合宿研修 成田誠之助  
 早稲田大学教授 高橋 清  
 芝浦工業大学教授 小林 晃  
 立教大学講師 小茂島和生  
 青山学院大学環境研究会 富田 功  
 慶応義塾大学教授 村上 直  
 青山学院大学講師 法政大学教授 加藤 一和  
 神奈川大学教授 神岡 孝次  
 東海大学教授 樋口 一辰  
 東京工業大学助手

武蔵工業大学電気工学科新入生  
 迎研修会 黒星 肇一  
 東京女子大学教授 村井 実  
 慶応義塾大学教授 文政大学女子短期大学部英語英文  
 科新入生セミナー  
 東京都立大学数学科新入生ガイ  
 ダンス  
 東京都立大学物理学教室新入生オ  
 リエンテーション  
 東京都立大学化学科新入生オリ  
 エンテーション 鈴木 慎一  
 早稲田大学教授\* 土方文一郎  
 立教大学教授 池上 和夫  
 神奈川大学助教 常田 稔  
 早稲田大学助教 河野 豊弘  
 武蔵工業大学電子通信工学科新入  
 生歓迎研修会 下森 定  
 学習院大学教授 清水 昌三  
 法政大学教授 千葉商科大学教授 清水 昌三  
 電気通信大学通信工学科新入生セ  
 ミナー  
 女子聖学院短大講師 浜田 辰男  
 都立商科短期大学商学科新入生オ  
 リエンテーション\*  
 職業訓練大学校新入生合宿セミナ  
 ー  
 都立立川短期大学新入生歓迎セ  
 ミナー  
 文京女子短期大学英語英文学科新  
 入生セミナー\*  
 東京造形大学部課長研修  
 高津看護専門学校  
 白百合学園高等学校修養会  
 制御機器研究会  
 計測自動制御学会  
 日本民俗建築学会  
 国際ロータリークラブ第258地区第  
 4回青年リーダー・セミナー  
 東京YMCA英語専門学校

ドイツ文化センター／文部省（ド  
イツ語教員研修）  
参画協会（若い森青年の樹研究会）  
上智大学カウンセリング研究所  
日本看護協会

6月  
（75グループ、延三、三七七人）

東京理科大学教授 国分 康孝  
東京都立大学法学部新入生オリエ  
ンテーション

東京理科大学教授 沖塩莊一郎  
東京経済大学助教授 富塚文太郎  
駒沢大学助教授 谷敷 正光

武蔵工業大学助教授 堺 孝夫  
東京学芸大学助教授 根本 正義  
津田塾大学数学科フレッシュマン  
キャンプ

成蹊大学助教授 佐々木克巳  
東京理科大学教授 富沢 稔  
早稲田大学助教授 西宮 輝明

東京学芸大（数学）新入生合宿研修  
東京大学助教授\* 奥平 康弘  
一橋大学助教授\* 竹内 啓一

東京都立大学都市計画研究室  
千葉商科大学助教授 影山 信一

告

▼飯田さんの功労に感謝する開館  
15周年記念（第11回）大学共同  
セミナー

主題 転機に立つ平和と人権  
期日 昭和55年10月24～26日  
※主題講演※  
東京大学教授 坂本義和氏

▲セクショニ演習▲  
A軍事化と人権（高橋進氏・坂本  
義和氏）／B人権と国際市民運動  
（馬場伸也氏・砂田一郎氏）／C平  
和と南北問題（北沢洋子氏・山本  
満氏）／D現代日本における平和  
と人権の思想（石田雄氏）／E日  
本における平和と人権（色川大吉

中央大学英字新聞学会 玉野井昌夫  
学習院大学助教授 宮腰 賢  
東京学芸大学助教授 岡 孝  
法政大学助教授 福田 一郎  
東京女子大学助教授 須田精二郎  
工学院大学助教授 前田 和美  
早稲田大学英語学会 色川 大吉  
東京経済大学助教授 丸尾 直美  
中央大学助教授 工藤 恒夫  
中央大学経済学会 五味 健吉  
法政大学助教授 星野 命  
聖心女子大学講師 水野 弘文  
電気通信大学助教授 松田 武彦  
東京工業大学助教授 深谷 昌弘  
成蹊大学助教授 堀野 定雄  
神奈川大学助教授 神奈川大学講師 深澤 俊昭  
神奈川大学講師 高田太久吉  
中央大学助教授 中央大学朝鮮文化研究会 金山 行孝  
法政大学助教授 早稲田大学助教授 大槻 健  
早稲田大学助教授 東京都立大学助教授 二村 敏子  
和光大学助教授 和光大学助教授 小峯三千男

氏・田中宏氏）  
▲記念シンポジウム▲明日を考え  
る—平和と人権をめぐる—  
日時 10月25日（土）午後一時半  
発題者 田中寿美子・色川大吉・  
坂本義和の諸氏

▼第17回大学教員懇談会  
主題 留學生の受け入れをめぐる  
諸問題—現状とその改善—  
期日 昭和55年11月15～16日  
※発題講演・パネル※  
文部省留學生課長光田明正氏、  
広島大学助教授馬越徹氏はかパネ  
リスト一〇名。

横浜商科大学助教授\*平野 文彦  
立正大学助教授 杉澤 新一  
相模工業大学講師 金谷 孝  
桜美林大学助教授 相馬 順一  
白梅学園短期大学保育科新入生オ  
リエンテーション\*  
日本女子大学附属高等学校  
関東聴覚障害学生懇談会  
第109回大学共同セミナー  
九大学合同セミナー  
高分子ミクロシンポジウム  
上智大学カウンセリング研究所\*  
いしずえ  
東京都立保育園園長会  
八王子青年会議所（八王子森林バ  
トルール隊）  
東京リコーダー教育研究会  
7月  
（108グループ、延五、五五三人）  
芝浦工業大学講師 藤澤 好一  
国際基督教大助教授\* 都留 春夫  
東京都立大学助教授 鈴木 浩平  
東海大学助教授 添田 実  
神奈川大学助教授 堀野 定雄  
中央大学経済学会 大川 章哉  
学習院大学助教授 横田 澄司  
明治大学助教授 菊地 昌典  
東京大学助教授 明治大学マスコミ研究会  
ミーティング連合会  
東京都立大学助教授 柳沢 治  
明治大学助教授 長谷川明彦  
東京都立大学助教授 児玉昭太郎  
中央大学助教授 那須 宗一  
国際基督教大学助教授 大島 貞夫  
神奈川大学助教授 大林 弘道  
電気通信大学助教授 鈴木 秀雄  
武蔵大学助教授 渡邊 欣雄  
芝浦工業大学助教授 芝浦工業大学建築学科八王子合宿  
セミナー

武蔵大学助教授\* 佐野 晃  
駒沢大学助教授 谷敷 正光  
東京大学助教授 奥田 央  
一橋大学助教授 堀部 政男  
東京農工大学助教授 小倉 紀雄  
法政大学講師 加藤 豊  
横浜国立大学心理・特殊教育学科  
新入生合宿研修  
成蹊大学助教授\* 下斗米伸夫  
一橋大学助教授\* 山澤 逸平  
東京都立大学助教授 田辺 良美  
東京都立大学助教授 奥山 典生  
東京都立大学助教授 石田 頼房  
早稲田大学講師 安西 邦夫  
日本大学助教授 栃原 敏房  
国際基督教大学教育心理学研究室  
サマー・セミナー  
東京大学助手 荒井 良雄  
東京大学助教授 齋藤 眞  
中央大学助教授 村越 邦男  
東京大学助教授 見田 邦介  
東京学芸大学助教授 宮腰 賢  
法政大学助教授 霜島 甲一  
筑波大学助教授 西川大二郎  
報告会 西川大二郎  
お茶の水女子大新入生セミナー\*  
中央大学瑞法会 井内 昇  
お茶の水女子大教授 和田 英一  
東京大学助教授 和田 英一  
東京大学助教授 大須賀節雄  
上智大学助教授 前田 寿  
東京薬科大学助教授 坪井 實  
東京農業大学助教授 釜野井正実  
東京工業大学助教授 末松 安晴  
東京大学助教授 衛藤 潘吉  
慶応義塾大学助教授 山田 辰雄  
早稲田大学助教授 大春慎之助  
早稲田大学助教授 松沢 哲成  
日本女子大学福祉研究会 高原 康彦  
東京工業大学助教授 深沢 実

相模女子大学講師 矢内喜久子  
東京大学助教授 虫明 功臣  
一橋大学助手 池 享  
千葉大学助教授 伊東 光晴  
東京経済大学婦人問題研究会 鈴木 隆  
神奈川大学助教授 須田精二郎  
工学院大学助教授 齋藤 良夫  
法政大学助教授 大島 清  
横浜国立大学助教授 柳下 勇  
横濱市立大学助教授 柳下 勇  
明星大学通信教育部 柳下 勇  
京浜女子大学夏季自然講習会 吉田 襄  
国士館大学助教授 吉田 襄  
東京工業高等専門学校 吉田 襄  
第110回大学共同セミナー  
文部省学生課（厚生補導研究協議  
会）  
国際キリスト教青年交換委員会  
日本ワイルド協会  
国際T.M.協会  
立川市姉妹市青年クラブ  
横浜生活教育研究会  
国立教会聖歌隊

編集後記

68・69号を合併して、開館15周  
年記念の特集を組みました。この  
15年、いろいろな苦難の中をここ  
まで至ったかげに実に多くの方々  
の暖いご支援と先人諸氏の高い思  
いを心から感謝とし、明日のあり  
方を謙虚に考えてゆきたく思いま  
す。大方のご鞭撻、ご叱正を何な  
りとお寄せください幸いです。  
なお7月開催の第110回大学共同セ  
ミナー「藝術のたのしみ」につい  
ては紙面の都合で次号に記しま  
す。（岡山）

〔注〕本号の「利用状況」では紙面の都合で  
企業関係グループ、個人利用、日帰り利  
用は省略させていただいた。